

家庭・保育所・幼稚園

N24
56(2)

幼児の教育

第五十六卷 第七号



7

新発売!!

イーストマンカラー使用

三井のレコード付人形スライド



世界の名作童話が目と耳から楽しめる

★初めてスライド界に登場したイーストマンカラー

★ビクター印(45回転)レコードに音楽と物語を吹込

★このセットでこの低廉!!

(スライド各18コマ300円)
レコード各150円)

(赤ずきん)

毎月新作発売

カタログ送呈

三井芸術スライド社

東京都中央区日本橋茅場町3の14

電話(67)2732 振替東京 91540

- | | | | | | | | |
|---------------------|----------------------|---------------|--------------------------------|---------------------------------------|---------------------|-----------------------|---------------------------------|
| ジン グル ・ ベル | かも とり こん べえ | かぐ やひ め | ヘン ゼル と グ レー テル | ピー ター うさ ぎと おと もだ ち | ピー ター うさ ぎ | あ か ず き ん | コ ジ カ の バ ン ビ |
|---------------------|----------------------|---------------|--------------------------------|---------------------------------------|---------------------|-----------------------|---------------------------------|

みなさまに長いあいだ、かわいがっていただいた、トツパンの童謡絵本が内容造本とも一新されて、より親しみやすい美しい決定版となって発売されました。以前にもまして、かわいがって下さるようお願いいたします。

トツパンの童謡絵本



東京日本橋茅場町 トツパン

全6集
各集7曲収録・楽譜付・合紙堅牢製本
全6集発売中
各70円



幼児の教育 目次

第五十六卷 七月号

表紙……………武井武雄

「幼児の教育の危機」を読んで……………牛島義友(2)

＜教育計画とその実践＞
幼稚園教育課程の運営の研究……………津守 真・佐久間重代・相馬誠子(6)

品川不二郎著
「幼児の教育相談」……………岡部静江・菊地喜久子

（書評）
子どもの印象から見た親への理解と要求……………室谷幸吉(26)

＜特集＞教師が子どもを理解するには

記録を通して子どもを理解するには……………小口忠彦(34)

絵を通して行動を通して子どもを理解するには……………角尾 稔(38)

教師が自分自身を理解するには……………相場 均(44)

帆足喜与子(46)

河尻朋子(49)

実際保育の場で子どもを理解するには……………宇田川照子(52)

谷口喜久子(56)

（4月号）
保育雑誌より……………(59)

「幼児教育の危機」を読んで

牛 島 義 友



最近のわが国における受胎調節、出産率の減少^{*}は直接幼稚園教育に響いてきた。高等学校では入学志願者が今年は激増したとか、大学入試には浪人がますます増加して今日の出産状況とは全然無関係のようであるが、もっとも年少の子どもを対象とした幼稚園には直接響いてくる。戦後出産が激増した時には幼稚園が入園難であり、どこも定員以上の園児をかかえ、志願者が定員の何倍だといって誇って(?)おり、これを緩和するために幼稚園の激増となったが、今日はもはや定員不足の悲鳴? をあげる姿となっている。

| 年次 | 出生数 |
|-------|-----------|
| 昭和22年 | 2,678,792 |
| 25年 | 2,337,507 |
| 30年 | 1,727,040 |
| 31年 | 1,661,615 |

幼稚園がふえて、子どもたちがテストもなにもされずにそのまま入園できることは親としてはこんなにありがたいこと

はなく、今日の姿は結構な恵まれた状態であるというべきであろう。ただ困るのは経営者の側であり、したがって、幼稚園の危機は幼稚園経営の危機であろう。今まで一年保育しかとらなかった幼稚園はこの際二年保育をし、あるいは二年保育であったところは三年保育に手を出すといったようなことで、余裕のできたクラスを活用することも誰でもが考えつく考えであろう。私立の幼稚園ならこんなことはさささと実行している。この点融通がきかないのが公立幼稚園である。坂元先生は「ある地方では、一学級の幼児数を五十人とし、それで園児を割った商だけを組数とし、一学級一人の割合で余分の教師を減らそうとし、あるいは現に減らした地方もあるようである」というのはおそらく公立幼稚園の話であろう。市町村費による教員給の削減がおこなわれようとし

ているとの話であるが、元来幼稚園の経営のために市町村は果してどれだけ負担をしていたというのであろうか。園舎の建築費の場合を除いて経常費についていえば、大ていのところは保育料でまかなっていたのではなからうか。保育料の額は地方によってそれぞれ異なるので、どこでもそうだとはいい切れないが、大部分のところでは少なくとも幼稚園教諭のサラリーぐらいはまかなっていたであろうし、また簡単にまかなえるものである。このことは保育料と園児数を考え、同時に自分たちの給料を計算してみれば保育さんたちでも簡単にわかり、したがって自分にまかしてくれば結構立派にやっくいけるといふ自信を持たすものではなからうか。ゆえにもし教育委員会などが経費を云々してとや角いったり、クラスを減らしたりするようならいっその際幼稚園の経営を全部主任保育母にまかせて独立採算制にしてみましたらどうであろうか。教育委員会の監督の必要があるというのなら経営の監査だけはし、その経営は主任保育母に一任してしまえばよろしい。

幼稚園の経営をまかされた主任保育母は早速教諭一人当りの幼児の定員の減少を計画するであらう。幼児を四十人五十人

持たされて良心的な保育ができるはずはないので、彼女らの教育的良心の満足されるまで引きおろされることであらう。文部省は定員四十名以下としているがこんな数では到底満足できない。保育所は三十名以下であるが、少くもこの線までおろしたいであらうし、私は二十五名にまで下げることをおすすめする。

二十五名くらいで幼稚園の経営ができるかと心配される方があるかもしれないが少くも私が愛育幼稚園において経験している限り、実に楽々と経営できるものである。この場合一人当りの保育料をうんと増額しなければ到底やりきれないといわれるかもしれない。しかし私は保育所の自由契約者なみにすれば結構やっくいけるとはつきり申しあげられる。保育所の経費の計算はかなり合理的である。一応必要な経常費総額を定員数で割って一人当りの保育料を定めている。この保育料を子どもの家庭の状況に応じて全額措置にしたり部分措置にし、措置の必要のない自由契約児からはそれだけの保育料を徴収せよと命令している。この命令を忠実に実行している限り保育所の経営もまた実に無理のない安易な経営ができるのである。私たちも僅か定員四十人くらいの小さな保育所

をなんら困難なしに経営している。幼稚園の場合もこの保育所のようなやり方でやっていけばよいのではなからうか。私たちの愛育幼稚園と戸越愛育園（保育所）との保育料は実はほとんど変わらないのである。（もともと保育所の場合は給食を受けるが）そしてこの保育料で人件費と教材費が完全にまかなわれる。

今少数の幼児の保育料でも経営は楽にできるといったけれども、いわゆる幼稚園の経営者たちはそれでは経営にならないといわれるに違いない。建物の営繕費、敷地建物の償却費はどこから出るかといわれるに違いない。たしかに経営者の大きな経営の苦労というのは実はこの点にあるし、投下した資本の収益、あるいは借財の返却に頭を悩ましているわけである。

しかしもともと教育事業である幼稚園を始める場合に、このような経営を考えるとところにむしろ問題があるのではなからうか。本来、幼稚園（私立）を始めようという場合には、止むに止まらない教育愛から自宅を開放して始めるとか、伝道のために教会に附設したものであり、ここでは打算的経営などは完全に無視して始められていたであらう。多少計算を

するようになった場合でも、日曜日以外はあまり使わない教会堂を幼稚園のために使うとか、広い境内を利用して幼稚園を始めるとか、あるいは自分の先祖から伝わった邸が広いのでこれを何か有益な公共のために用いようとの心構えから始められたものが大部分ではなからうか。公立の幼稚園や学校附属の幼稚園の場合は一応敷地があるから始めたとか有休教室があるから活用しようとして始められたものが大部分ではなからうか。その他地域の人々、あるいは後援者団体から寄付を援助してもらって、それによって園舎を作っていたであらう。元来学校経営は始めから土地を買い、建物に投資してしかも適当な利潤を得るといった性格のものではない。したがって、この建学の精神、幼稚園を始めた時の気持で考えるならば、経常費がとんとんにまかなっていれば、設立者もそれで満足すべきではなからうか。坂元氏の昨年六月号の「幼児教育の危機」の中の「これからは幼稚園営業がもうかる商売でなくなるであらう。わざわざ割の合わないようにする必要はないが、このことを頭において園の運営に当るべきであり、さらに心からの幼児への愛情に基づく教育的な配慮を第一義としていかなばならない。こう覚悟をはっきりたてなお

す時が来たのである」はきわめて同感であり、否、これから改めて覚悟するのではなく、始めからこの覚悟で幼稚園を始められたものと信ずる。またこのような純粹な教育的な情熱に基づいた仕事に対しては必ずしも経済を超越した力が働らくものである。老朽した園舎を改築するというような場合には必ずしも援助者があらわれ、寄附金が集まるものである。なにも先までよくよと金の計算をするよりも、ひたむきに保育に精進すべきではなからうか。

坂元氏の「幼児教育の危機論」は幼稚園経営者を反省させることばであるが、秋山ちえ子氏の幼児教育の危機に対する反省は大部ピントの狂ったお叱りである。一般論としての幼稚園教育や保育者に対するお叱りならば謙虚な気持ちで拝聴し、ひたすらおのれの至らなき、足りなきを恥じたいと思う。しかし、最近の幼稚園入園児激減の原因として幼稚園教育に対する母親の不信だとか、教育者の無能力、保育の力でたためさといったようなことをあげて非難するならば、これとはんでもない錯覚であろう。今日は幼稚園の保育は無論満足な状態ではないし、弁解などをしたくはない状態である。しかし、五、六年前に比較するならば著しい向上をしていると

いってよからう。以前は高等学校を出ただけぐらいの人も少なくなかったが、今日は二年課程を終えた保母が多いし、四年の大学課程を終えた女子大学児童学科の卒業生の中にも進んで保母になるものも著しくふえてきた。また保育者たちの向上心はあらゆる学校教師の中で最も強烈であり、講習会を開けば必ず数百人の聴講者が殺到する。また保育内容についても以前は無計画なものもあつたかもしれないが、今日はカリキュラムについての研究も非常に盛んであり、また保育者たちを指導するカリキュラム専門の雑誌なども何種類かあらわれている。このような盛観はかつてはみられなかったものである、また以前は二、三年勤めてやめる人が多かったが、最近結婚しても保育を続ける人がふえてきており、経験年数もずっと多くなってきた。

ゆえに保育者をこの際責めるのは見当違いではなからうか。しかし、私は保育界の外部に対しては保育者の權威を強く主張したいが、一方保育界内部については絶えず自己反省を行い、より良心的な保育者たらんと心がけたい。

(筆者はお茶の水女子大学教授)

幼稚園教育課程の運営の研究 ①

津 守 真
佐 久 間 重 代
相 馬 誠 子
岡 部 静 江
菊 地 喜 久 子

《教育計画とその実践》

はじめに

幼稚園で毎日どのような活動を計画し、実践していくかということとを考えると、私どもはいろいろの要素を考えていかなければならないことに気がつきます。いま、直接に対象となっている子どもたちが、どのような能力をもっているか、どのようなことに関心をもっているか、親はどのような考えをもっているか、子どもをとりまく周囲の関心がどこにあるかなど、その時その時にあって判断しながら計画し、その計画をすすめていかなければなりません。ここに現場のむつかしさもあり、また現場の教育をすすめていく上の面白さもあるでしょう。

この研究では、実際に毎日指導した結果を、記録にのこしていくことよって、次の教育の計画を立てるのに参考資料とすることができるだろう、という考えのもとにすすめられたものです。ことに同じようなことを計画する場合には、前にやった成功や失敗の実例を参考にするこことよって、一層よい計画を立てることができるで

しょう。

この研究は、東京都研究協力学校として、昭和三〇年度より二年間にわたって東京都新宿区立四ツ谷幼稚園においておこなわれたものです。

I 基本的問題点およびその検討

1 カリキュラムの考え方について

「カリキュラムとは幼稚園や学校における個々の子どもの実経験の総体」であり、したがって、各月毎に一定の項目によつて子どもにさせるべき活動を配当したような表をいうのではありません。また、よくカリキュラムの成果が表の形で示され、その形式そのものが、カリキュラムであると誤解しているように見られることもありすが、一度こしらえておけば、あとは毎年それによつてやればよい、というような固

定し、わくづけられたものが、カリキュラムでないということ。これは皆の一致した意見でした。

もちろん年間の教材を配列したものは、参考資料として役に立ちます。このような意味で従来のカリキュラムを整理してみると、

第一には、一年間を通じてよりこまれるべき活動や経験を配列したものがあります。

第二には、一年間を通じての教材や資料を配列したものがあります。

この二種類のカリキュラムは従来きわめて多くのものが作成され発表されています。これらの資料が一般に参考とされる価値をもつためには、長くこの分野の経験をして豊富な見識をもった人々が、子どもの発達の状況や社会の要求などいろいろの面を考慮して、検討をしたものでなければなりません。

このようにして検討されたものは、個々の教師が教育をすすめるに当って参考資料として大いに役立つでしょう。

(例 昭和二七年度東京都幼稚園教育課程試験案、保育ノート、学芸大学附属幼稚園教育課程試験案、保育ノート)としたことは、上の種類のものをもうひとつ加えようとすることではありません。

私どもが試みたことは、毎日の保育を最善に運営していたときに、その記録を積んでいけば実際に実践されたカリキュラムが、そこに残されるはずだという考え方に立ち、力動的にカリキュラムを改善してゆく工夫をしようということ

にありました。

2 毎日の活動や経験を選ぶには何を基準にしたらよいか。

以上の考え方からそれでは毎日子どもたちに経験を与えていくには何を基準にしたらよいか。ということが先ず問題になります。いうまでもなく、保育の目標を達成するために、毎日の保育の営みがあります。どのような道を経て目標に達するかは、組により、場合によって、いろいろでしょう。

それはあらかじめ決められたわくがあつて、それを基準にするというようなことによつてきめられるのではなく、むしろ、毎日子どもが生活しながらぶつかる問題や、熱心に追求している活動自体に手がかりを求められるべきでないでしょうか。そして、子どもの毎日の状態を注意深く観察してみることにしましょう。

3 実際の記録に当つての問題

① 子どもの活動や経験の中に現われる興味や問題点の記録について

毎日の遊びの場で子どもたちの興味を中心になっているものについて実態を記録していきました。しかし、ひとりの教師が、四十数名を受けもち、余剰の無い上からも、また、遊びのグループが幾つも分かれ、しかも常に変化していくという点からも大変であるし、そのグループを作る子どもによつても興味と活動は異つてくるので、果して正しい記録がとれるか、はなはだ疑問でした。

しかし、これをしたことによって、子どもたちの個々の要求や興味を始めとし、細かなところにまで教師が観察し、反省する「目」を得たということは、研究の土台になったばかりでなく、日常の保育を進めていく上からも大きな進歩でした。ただ現状にあって、保育中に記録して歩くことは長期間は許せないことであるし、実際に容易なことではなく、また、記録の取り方によっては弊害を伴うこともあります。

② 記録の方法についての問題点

さて、このように子どもの興味あるいは、教材・目標の持ち方などを反省し、観察したことを記録に残していったわけですが、実際に書く、ということになると、どう「まとめ」て書きあらわしたらよいかという問題が起って来ました。

子どもの目につけるもの、経験させたいこと、したいこと、すべて皆貴重で、あれもこれも、と書きとめておきたいことばかりであるし、どれも皆、カリキュラム運営上の大切な資料になるように思えて、これをどう要領よく書きあらわし、残していったらよいかにきわめて苦労しました。そしてその形式や記録の仕方についていろいろ検討したのです。最初のうちはあまり細かすぎてかえって要を得なかったり、読みにくかったりして、見やすく、書きやすく、実際に役立つという点から考えると不十分でした。何回も改訂の結果現在は第2表の要領で記録していくことになりました。しかしながら実際の保育をおこなっていく上からまた考慮されるべき点も残っている。

4 単元と経験

こうした実践記録によって、子どもたちの共通な興味と問題点、能力の程度が分ってきたのですが、次に子どもたちの生活の中に目標をもち共通な題材のもとにできるだけ多くの望ましい活動が総合できるようなまとまりを与えることが必要です。このまとまりは普通主題とか単元とかいわれていますが、経験のまとめ、という意味からここでは「経験」とした。

従来主題あるいは単元としてとり上げられているものは、きわめていろいろです。「秋のみのり」というような抽象的なものから「お店やさんごっこ」という具体的なものなどいろいろみられますが、私どもはなるべく具体的で、しかも「多くの経験を含んだまとまりのあるもの」がほしいと思います。「のりものごっこ」「お店ごっこ」などというはつきりした具体的なものを取りあげ、これを「経験」と呼ぶことにしました。

しかし、こうした考えはあってもなかなか適当と思われるものが考えつかないで、もっとその時々々に適当なものがないか研究中です。

この期間はその経験によって一週間あるいは二週間あるいはそれ以上と、いろいろであり、それぞれ子どもの活動の状態によっても変って来ます。実態にそくし、常に弾力性をもたせなければなりません。

5 評価の観点

① 一つの経験をした後にはその経験のねらいとした目標を達成することができたかどうか、子どもの実際活動の様子を記録に残しながら反省します。

② とりあげた経験がこの時期で果して適切であったか、組の状態、子どもたちの興味の対象と発達過程、教師の指導の方法などを評価し記録していきます。

たえずこのような評価をすることによって運営の技術も高まって来たように思います。

6 目標と経験の検討について

こうして、年度末を迎えて、一番問題であり疑問にも思っていたわれわれの目標と経験が、果して、妥当であったかどうか、検討をしてみました。

① 子どもの興味と活動にそった経験を選んで来たつもりでありながら、もっと適切な経験があるのではないか。また、

a. 従来のもっとした教師の経験

b. 毎月の子どもの生活における教師の経験や観察

c. 今までに発表されているカリキュラムの表（主に東京都のカリキュラム）

の三つの観点から、計画を立てることにしながら、実際にはc.の検討が極めて薄く、子どもの時々々の状態から目標を立ててきた面が強いたので片よったものではなかったか、を考えて、信頼のおける幾つかのカリキュラムから目標と単元の部分を抜き出して比較検討をしてみました。（第1表参照）

② またこうして記録していった目標が実際に当ってその時期

に適當であったか、子どもの能力にとって高過ぎはしなかったか、あるいは目標を達成することができたか、などを考慮して、みんなが集まっているいろいろと目標の適否を検討してみました。（第2表参照）

7 記録の形式について

このように日々記録し、あるいはまとめた記録を残していくということとはたびたび述べたように保育を進める上に役立つながらも、掃除、事務一切をしなければならぬ教師の立場にあたって、本当に容易なことではありません。そこで何とか簡単で、しかも当を得た記録の取り方はないものか、または、書きやすい形式はないものか、としばしば話しあい、検討をつづけました。第3表が最後の形式です。（岡部静江記）

II 実際上の問題

● 予想される活動について

一口に「予想される活動」といっても、それは、長期間（一つの経験主題が終るまで）にわたる大まかな予想と、毎日毎日のやや細かい予想とに分けられると思います。

1 長期間の予想のたて方

これは一つの経験（主題）が終るまでの期間を意味し、例「お店ごっこ」をあげれば、その導入から中心的活動、さら

に次の経験主題に入るまでの子どもたちの活動について大まかな予想見通しを立てることをいいます。

「お店ごっこ」の予想される活動例

導入期

- お店の品物から話し合いを始める。
- お店ごっこの歌や、リズム遊びをする。
- お店を見に行って好きなお店を絵に描く。

中心の活動の期間

- 友だちの作ったものを見合う。
- 作ったものの売り買い遊びをする。
- 売り買い遊びから、いろいろなあそびを工夫する。
- お店ごっこの品物として、紙芝居やお面を作る。
- 紙芝居ごっこ、劇ごっこをする。

次への導入期

以上のような、三つの期間に大きくわけて、一応の予想をたてます。またその場合は、一つの経験(主題)による活動が終ると次の予想をたてるようにし、細かいことはできるだけきき、大きな動きがわかるようにのみたててきました。机上でたてる予想は、あくまでも予想であるので、広く巾をもたせ、融通性をもたせるように、そして、できるだけ実際にいかされるようにと考えたので、細かい予想はできるだけききました。

2

毎日の予想のたてかた

いわゆる日案においては、さらに具体的な細かい予想をたてることが可能でしたので、昨日までの子どもたちの活動状態や、評価反省から明日の予想をたてるようにしました。

「お店の品物をつくる」という大まかな予想から、さらに「草履をつくる」とか「モール、ビニールなどで好きな品物をつくる」とか、その時々目標によってもちがいますが、できるだけ具体的な細かい予想をたてました。予想される活動として、最も具体的に決めるのは、明日の予想で、これらこそ、最も、実際の、カリキュラムの運営にも直接に役立ったと考えられます。

しかし、明日の予想できえ、創造的活動においては、予想できない面が多く、その時にならなければどんな活動が現われるかわからないのです。そこである期間の予想など、たてる必要もないのではないかという気持もありましたが、やはり細かいことにのみ心をくばっていると全体の流れからはなれやすくなるきらいがあるので、この全体の見通しと明日の具体的な予想は、ともに平行して考えられなければならないということにおちつきました。しかしながら、幼児の場合、どの程度の予想が可能で、実際的であるかについては、まだまだ議論の余地がのこされています。

3

教師の教育的意図

たとえ、計画はおおざっぱでも、はっきりした教育的意図をもって、子どもたちの活動を予想し、それを実際にこなしていくならば、たとえ予想外の活動が現われても、動ずることなく、着々と目標も達成されるでしょう。

要は、教師の教育的意図のいかんによるものですから、その導き方によってはある程度、予想どおり生き生きと活動させることも可能です。これには保育技術の問題も加わるので、指導法についてのたゆまない研究が必要になってきます。

●予想と実際について

一つの目標を達成させるために、いくつかの活動を予想し、初めて実際指導にあたるのですが、予想した活動は、つねに、幼児の生活に無理なく生き生きと展開されるように、導びかれなければならないでしょう。しかし、実際に行なってみると、時間的なくいちはいや、興味内容のくいちがいがいもしばばみられて、予想と実際についての研究の余地は数多く残されています。まず計画したことを、実際にどのように生かしていくかということが重要な問題となります。この点について、子どものささやかな研究からかち得た、種々の問題点やそれらに対する考えをまとめてみましょう。私も、毎日の計画を立てて、実際保育をおこなってくるうちに、次のような三つの実体が見出されました。

1 予想と実際の実体はどうであったか

- 第一 予想した活動が無理なく実施された場合。
- 第二 予想と実際がくいちがいがい、子どもたちがその計画にのってこなかった場合。
- 第三 予想以上に、発展して活動が次々と拡大されていた場合。

以上の三つの実態から、それならば予想通りうまくいったか、なぜいかなかったか、という原因について、そのつど残してきた実践記録によっても反省し、追求してみました。

では次に予想と実際のくいちがいを生じたという第二、第三の場合の例をあげて考えてみたいと思います。

2

予想と実際のくいちがいをみた具体例

(A)子どもたちが予想通り活動しなかった場合。

①原因と思われる点

地域の事情や特殊事情に影響されて

②その実際(おまつり)

昭和三十年の六月にとりあげた「おまつり」の経験が、非常によく発展し、社会性、創造性を養うためにも役立ったので、三十一年も同じ時期にとりあげたところ、地域のおまつりが去年程盛んでなかったことや、ちょうど、他園の研究会とぶつかったために、教師もおちついて指導することができなかったという特殊事情もあり、三十一年度はどの組も発展しませんでした。

③指導

計画であるからといって、形式的におこなうことをきけ、こうした実態を知り、原因がわかったならば、現実の幼児が何に共通の興味をもっているかを見きわめて、次の計画へ進めるようにしました。

ちょうど小さい生物を飼っていたことから、それらに対する興味関心も高まりつつあったので、「小さい生物」のあそびにきりかえたのです。

興味本位にするというのではありませんが、興味のないところには、学習もなく、したがって目標を達成させることもできないので、実態にそくして変更しました。目標を達成させるためならば、その実際は「おまつり」のあそびであっても「小ざ

い生物」のあそびであつても、どちらでもよいと考えるからである。

(B) 予想以上に活動が發展し、次々と拡大されていった場合。

①原因と思われる点

○幼時の派生的な興味による動的な活動

○未分化な総合的な生活

○自主創造性を強調する教育の傾向

②その実際(A)

「お店ごっこ」のあそびで首飾りを作らせようと計画し、モール、ビニール、おはじぎ、飴の紙、銀紙などの材料をそろえた時のことです。



三人で協力して始められたおせんべやきです。やけたやけたと真剣な顔、女の子が買って来ました。

要を感じて犬の首輪づくりがおこなわれ、犬のさんぽごっこにも發展し、男女仲よくあそぶひとときも、持たれました。このように材料をみて作り出したものからあそびが展開

思い思いの首飾りが作られると、もう売り買いをして首にか

けたり、ままごとあそびのおく

り物にして遊んでいました。し

かしそれだけではありません。

眼鏡を作つてそれをかけてはお

店の主人になつたり腕時計、耳

輪などを作つてかけ、ままごと

のお姉さん、お兄さんになるな

ど思わぬあそびが展開してきま

した。またその時偶発的にあそ

び出した犬ごっこから首輪の必



犬ごっこから首輪がつくれ、犬のお散歩です。Y子さんは草履をはいてうれしそう。

したり、あそびから製作活動が現れるなどの子想外の活動が次々と生れてくることはしばしばでした

②その実際(B)同じく

「お店ごっこ」をさ

せている時のある

日、スキ一の経験をしてきた、リーダー的男児Tが、二、三人

を誘つて積木でスキーバスをつくり出したことから、スキーご

っこ、木工のスキーづくり、やどやごっこことに関連あそびなど

に發展していった日のことでした。

③指導

△その実際(A)

この時の目標を考えてみると、

○お店の品物を工夫して作るように。

○作つたものを遊びに活用し、仲よく友たちあそびができるよ

うに。

○同時に売り買いあそびも仲よくおこなわれるように。

ということでしたので、幼児の創造的活動をとりあげながら、売

り買いあそびに関連づけたり、さらに他のあそびに發展するよう

に仕向けて、その目標達成をはかりました。

△その実際(B)

この時期は十二月で季節的にもこうしたあそびをあこがれる時期ですし、お店ごっこのように製作活動の多い経験をさせている

時には活動的なあそびを適宜におりこんでいく必要もありますので、この派生的な興味によるスキーごっこを、丁度良い活動とみることができるだけ多勢が参加するような誘導をこころみました。「スキーを作るから板をちょうだい」といって来た子どもにはすぐに適当な板片をあたえたので一時は木工あそびが展開しました。ひもでしばり、竹棒を両手にもって、板の所をすべろうという考えなのです。そのつど必要な材料は、あたえるようにしました。女兒のやどやではおべんとうやくすりを子どもたちと一緒に工夫していました。しかしこのように予想外の活動がどんどん発展していった時、さてどこでやめさせるべきか、どこまで発展させるべきかが疑問でしたが、できるだけ自然の形でお店ごっこに結びつけることができたらと考え、遊んだあとは、スキーをお店に並べることにし次の機会からは、うりかいを通してあそぶようにさせました。

3 指導に弾力性をもたせる

創造性を養う教育においては、モール一本からも木片からも、種工夫され、あそびが發展します。そのたびに教えられることは、いかに大人が観念的で創造性にかけているかということであり、時には幼児の中にこそ、すばらしい計画がひそんでいるということなのです。したがって、何を作りどんな遊びをさせるかということを細かく規定し予想することもできないし、さらにそれ以上の発見的な活動に対してはその折にふれて、適切な指導が考えられなければならなかったのです。

子どもたちの創意をいかしながらしかも目標達成の方向へと努

してはきましたが、子どもたちが総合的な生活をしているのと、派生的な興味による活動をおこしやすことから、この指導のむずかしさを今さらのように痛感したことでした。これらを考え合せても、ひとつの計画だけを予想して押しつけたり、またその計画が果されれば、それ以内の活動には指導もいらないと考えることはできないと思います。そこで計画と指導に弾力性をもたせる必要が生じます。

以上にのべた具体例から、もういちど、なぜ弾力性が必要かという点をまとめてみると、大体次のような点があげられるのではないのでしょうか。

4 なぜ弾力性のある指導が必要か

① 幼児は常に周囲の環境の変化や、特殊事情に左右されやすいので派生的な興味による活動が多いが、場合によってはこの興味を利用して適切な指導をすることにより保育の効果をあげることもできると思います。

② 幼児は未分化であり総合的な動的な生活をいとなんでいるので、その活動も社会、音楽リズム、絵画製作、観察、言語と發展していく傾向が強い。そこで総合的な動的な、指導が必要となる。

③ 保育全般にわたって、自主創造的活動を強調していると、この面の活動が盛んになり、予想外に發展していくことも多いが、しかし、いつどこでそれらの芽を表わすかを予想することはできないので、計画と実際とをみつめながら適当なバランスを保つていくような指導が考えられなければならないでしょう。

一つの指導の型にはめることは、形式的にも流れやすく、新鮮な興味もわかないし、もちろん自主、創造性はやしなわれな
いと思います。

それでは、どの程度の弾力性が必要かということになると、これは教師一人一人の指導技術にも関係してくるので、まずまずむずかしいくなりますが、ただ、こんな点に留意していったらよいのではないかと、いこうばく然としたことは、私どもの経験の範囲でいえるかもしれないので、次に、それらについての考えをしるして多くのご批判を仰ぎたいと思います。

5 指導に弾力性をもたせるための留意点は何か

①常に目標をもった指導でありたい。

予想外の活動が現われた場合も何を目標として展開させていくかを考え、はっきりとした基盤にたつて、指導するならばその活動は価値づけられるでしょう。したがって、一時的な興味に流され、目標も忘れるようなことにはならないと思います。

②目標にも巾をもたせ、あせらないでその指導にあたりたい。

目標を持った指導を強調してきましたが、ここでは、目標のもちかたについて考えてみましょう。興味のおこらない活動や瞬間的に現われる一つ一つの活動まで、目標にしばりつける必要があるでしょうか。

毎日毎日くりかえし指導しているうちに、目標が達成されていくと考えるならば、かえって実態にそくしていると思うのです。実際におこなってみて、この目標はまだ達成されないと見た場合は、さらにその期間をのばすことも望ましい方法ではな

いでしょうか。またその時の目標にははずれていたとしても、他の目標による望ましい活動であったならば、目標も動的に考えていいのではないのでしょうか。

③共通の興味や欲求をとりあげるようにする。

目標を達成させるためにも、幼児の興味や欲求が大切な基盤となります。つねに問題になったことはその興味のとりあげかたでありました。個々ばらばらの興味を取り上げていくのでは、興味中心にもなりやすいし、それかといって、計画の押しつけになっていけないうところにむずかしさがあるのです。そこで、導入・誘導に重点をおき、ある程度、共通の興味となるように、導びき、それをとりあげるようにしました。そして、共通の興味がおこらない場合は、その計画や、導入方法を反省し、適宜にきりかえてきました。

④総合的な活動をさせながらも、自然の形で、経験活動(主題による活動)に結びついていくようにしたい。幼児は未分化であり、総合的な生活をしているので、またその指導も総合的になされなければなりません。が、「生活のまとまり」ということを考えた時にできる範囲において、その時々を経験(主題)につながるようにもっていくべきではないかということも考えられました。すなわち中心的な活動が浮び上るような指導が必要でしょう。

⑤幼児の自主、創造性を適切にいかす指導でありたい。

幼児自ら生み出すように、またそれがさらによりよくのびていくように全生活を通して指導されている今日において幼児が生み出す新しい活動が日々の生活に現われてくるのは当然です。

したがって、それらを生かした動的な指導が工夫されなければならないと思います。

6 残された問題点とその解決

以上予想と実際の実体から、弾力性ある指導の必要性およびその指導上の留意点についてのべてきましたが、まだはっきりした予想と実際のあり方というものがつかめない状態です。

予想と実際の、うまくいかないのにはその計画と指導に必ず原因があるから、それを追求し、解決していくよう努力することが何より大切であることはわかっていますが、未熟な私どもの間ではなかなかむずかしい問題でした。

現在一般の傾向として、

「教育だから必ず指導があり、興味中心ではいけない」といわれる向きもあり、興味のないことを何とかして、ひっぱっていかうと不自然な誘導をするきらいもあります。

幼い時代であり、しかも総合的な活動をしていることを考え合せると、どこまでどう計画の中に入れていくかが大きな疑問であり、また予想外に次々と発展していった場合も、どこまで発展させ、どこでやめさせるかについては具体的な指針もないので、私どものつねに思索するところです。いずれにしても実際指導にあつては教師の高度な指導技術が要求されるわけでその具体的な方法については、実際家の研究と創意によって、今後ますます向上されなければならないと思います。すなわち、実体を通じて、いろいろの問題を見出しながら、研究的に日々の保育を進めている態度を、教師自身が身につけていくとともに、その日その日の実践記録をのこし、そ

れを保育向上の資料にしていくことが何より大切ではないでしょうか。計画をよりよいものとするためにも、また、実際指導を向上させていくためにも、この実践記録を重要視してきました。

● 実践記録について

以上の考えから種々の問題を解決しながら、よりよいカリキュラムの運営をはかるために、私どもは毎日毎日の幼児の生活の実態を把握し、次の指導の参考とするための実践記録をのこしてきました。

今日は、こういう目標のもとに、このような計画をたてて、おこなってみたが、実際の幼児の活動は、どう展開されたか、遊びのグループは、どんな状態であったか、問題をもつ子ども動きは、どうであったか、さらに指導上、気づいた点などを、そのつど記録にのこしていきました。次に具体的な方法について説明しましょう。

1 毎日の記録を、どのように残してきたか

① 保育中のメモ

保育中に、くわしい記録をとることは、困難ですが、その中心的活動について何人位のグループが参加していたか、そのグループはだれとだれかということ、メモ的にカードに記録することは、ある程度可能でした。これらのことを保育後に思い出すとしても、なかなか正確につかむことができないので、このメモは非常に大切な参考資料となりました。また、メモのとるかたとしては、自由活動の時にちょっとした時間をみて書き

メモの一例

MEMO

(1.30)
(ねらい) (紙芝居つくりを通しての協力と豊かな表現力)

| | | | |
|---------|---------------------|-------|-------|
| 紙芝居あそび | A 27人 | B 10人 | C 5人 |
| ” つくり | A 35人 | B 7人 | C 0 |
| 協力的グループ | 4人(たつお、ひろし、けん、しげあき) | | |
| | 3人(きよこ、えつこ、みのこ) | | |
| | 2人(あつこ、きくえ) | | |
| 表現力 | A () | B () | C () |

以下省略する。

(注) いずれも、形式については、各自、自由の形式をとっているのですが、表としてのものはないが、研究的にいろいろの記入方法をおこなってきたわけである。

② 保育後に一日の記録をまとめる
 入れたり皆で話し合いながらそれとなく書くようにしました。

これらのメモを資料にしなから、次に一日の活動状態の経過を、記録にのこしてきました。ここでは、導入期の状態や、中心活動の状態、そこに現われる個々のうごき、問題などを思い浮かべながら、指導の反省とともに、書くようにしました。

(注) いずれもメモの形式については、各自、自由の形をとっていますので、園としてのものではありませんが研究的にいろいろ

の記入方法をおこなってきたわけです。

2 記録の整理および考察

次に毎日の記録を蓄積して、一つの経験の指導経過の記録をのこすようにしました。

以上のようにして残した毎日の記録を蓄積して、一つの経験活動が終わった後に、それらをまとめて、一枚のカルテのような形式にのこしました。別表「お店ごっこ」を参照ください。

3 記録の説明

① 計画の部分

経験、経験設定の理由、目標、予想される活動、留意点までを計画の部分として記録に残しました。なお、予想される活動には、準備も含めて記入した方が、後になって、この活動にどんな材料を使ったかがよくわかるので実際的ではないかということも考えられました。

② 実際の部分

◎活動について

一月の記録だけでも沢山あるのに、何日かをまとめて、その活動状態がわかるように、一枚の紙に記入することは、非常に困難な仕事でした。

くわしすぎれば、あとになって読みかえす気もおこらないし、簡単すぎたはその様子もはっきり浮んできません。そこで中ようをとることにし、後の参考になると思われることだけを、簡条書き的に記入するという結論に達しましたが、今もって適切

なあらわし方がつかめない状態です。

◎経験外の活動について

実際の活動の記録で、問題になったのは経験外の活動をどうするかということでした。別に一項目を設けて記入することも考えられましたが、経験外といっても、実際の活動の中でおこなわれているわけですから一緒にふくめてしまう方が実際的ではないか、別にとり出すのは望ましくないという意見に落ちつきませんでした。しかし、後の参考になるために、記号をつけて記入するようにしました。

◎記号について

◎印は……派生的におこった活動で非常によく発展し、有意義であったもの。

・印は……経験活動として流れに従って現われてきたもの。
△印は……ぶらんこ、鬼ごっこ、ジャングル遊びのように、いつもくりかえし、行われる活動。

◎この間に派生した興味と、次の経験への予測について

この記録を見ることによって、次の経験へのつながりがわかるようにしておきます。したがって、次の経験に「ゆうびんごっこ」が考えられていたとしても子どもたちがそれに対する興味を何らしめさなかったとすれば、無理に「ゆうびんごっこ」をとりあげる必要はなく、むしろその時興味をもち始めた「戸外遊び」とした方が実態にそくしていると考えるので、そうしたことをこのらんに記録して、経験と経験のつながりを、持たせるわけです。

◎評価について

ここでは、目標がどの程度達成されたか、特殊な幼児の状態は、どうであったか、また、この経験をとりあげたことが、良かったか、わるかったか、という総合評価および評価の反省も含めて、簡単に記入するようにしました。そして記録の中でも評価をことに重要視することにより、実際の向上に役立てました。

4

記録の活用について

前にもお話ししたように、私どもは、実践記録をとることによって、実際に、再認識することができたほか、この記録が次の指導に役立つ重要な資料となったことはいうまでもありません。

経験から、経験へと自然に流れていくような配慮も、この記録から考えられますし、ことに評価を何よりの参考資料とし、これを見ては次の計画を立てる手がかりともすることができました。もっと具体的に述べますと、同じ「お店ごっこ」の経験をとりあげたとしても、幼児の年齢や、組の状態、教師の心ぐみなどによって、展開の内容もちがってきますし、それにとりまう評価もそれぞれに現われてくるわけです。

次の年に同じ経験「お店ごっこ」を取り上げようとするときに、この記録が、有益な資料となりました。

その通りにするというのではなく、成功した点や、失敗した点などを、記録によって学ぶことができました。

この意味から実践記録は、他の教師の参考資料としても、生かされました。

| 価 | 目 標 |
|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <p>◎グループによる製作から協力的態度を養うことはなかなか、むずかしいと思つた。子どもたちのグループはその日によつてもかわるものであり、また協力のしかたもリーダーによつてずい分違うので、良いリーダーの組（本屋、ばん屋、玩具屋）は非常にたのしく協力的であるが、多くは二、三人でまとまっていたようである。</p> <p>◎材料の工夫については効果があがつたように思われる。常に創意工夫するもの十八名、この経験から創造的になつたもの十五名で組の三分の二はそれぞれについて創造性がのびてきた。</p> | <p>◎種々の店を知らせ暮の街に関心を向けさせる。</p> <p>◎継続的な作業をたのしませ、終りまでやりとげる態度を養う。</p> <p>◎グループによる製作を楽しませ協力的な態度を助長する</p> <p>◎材料を工夫し創作するように仕向ける。</p> <p>◎うりかい遊びを通して社会経験をさせる。</p> |

◎記録を生かして次の計画を考慮した一例
三十年十二月に行なつた「お店ごっこ」の評価から「継続的作業としてのお店ごっこ」の、もち方が反省させられましたので、その一例をあげますと次のようであります。

昭和三十一年十二月にとりあげた「お店ごっこ」の目標と評価をごらん下さい。

評価の◎印の箇所が、大きな反省事項としてとりあげられました。すなわち、

◎長期にわたるグループ製作が、幼児の場合むずかしいのではないか、形の上では、やっていたとしても、本当に協力的でない場合が見られるし、グループも始終かわるので、グループ毎にお店をつくるということも適していなかつたように思われる。

◎ある期間、製作をつづけて最後にうりかいをするという、お店ごっこのもちかたは、幼児の生活にびつたりしていなかつた。

以上の反省から三十一年度にとりあげるお店ごっこを考慮しました。

このように、記録を重要視したことが、保育の実際を向上させるのに役立ったという尊い体験を得て、私どもは、ますますこの実践記録の必要性を痛感したのであります。

記録が記録に終ることなく、実際に生かされる記録であるようにつとめながら、努力してまいりました。

評

○継続的な作業を、終りまで興味深くさせるのに苦心した。途中で必ず興味がうすらぐので場面の展開を工夫しては予定より売り買い遊びを早めたことが、かえって良かったと思われる。

○仕事に熱中した時程、片付けが忘れられるので、片付けの習慣がみだれたようである。

○お店の品物を作ればすぐにでも売買して遊ぶのだと考えている子どもたちなので、これがある期間作ることに費してその後一度に売り出すことについては、少考えさせられた。売買には非常に興味をもったが一度にその意欲が発散するため雑然としたきらいがある

○この経験をしたことにより製作意欲が高まり、創造性が伸びた子どもも多い。とくに社会性の乏しい子どもは製作によつて自信を得たことにより少し明るくなつたように思われる。

○お店に対しての関心が深まり、クリスマス近しい街の様子から、サンタクロースの物語り遊びも盛んに行われて来たので、次の「子ども会」の経験にも自然に入ることが予想される。

31 年 12 月「お店ごっこ」

| 評 価 | 目 標 |
|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <p>・製作物の評価</p> <p>進んで作りだす（十四人）。ちょっと誘えば作り出す（二十五人）。気がむくと作る（五人）。表現内容のよしあしも大体これに正比例していた。</p> <p>・製作物はできるだけ幼児の創意を生かすように、また遊びを通して、創造性をのばすようにも努力して来たが、幼児の方が、はるかに創造的で、応用性もあり、教えられることが多かった。</p> <p>○去年はグループ製作を通して協力するようにもつていったが、今年、製作したものを遊びに活用させながら、遊びを通しての協力を目標として展開させてみた。結果としては、今年の方が実体にそくしていたと思われる。</p> <p>○作つたそばから始終うりかい遊びをさせていたので、自然にうりかいはの態度も身につく、最後の大売出しも、おちついて、行われた点は成功だった。</p> <p>・製作材料が豊富にあることは望ましいが、やはり限度があるので、不十分な点もあった。</p> | <p>○お店づくりの製作を通して創作的態度を助長しその表現力をのばすとともに、作つたものを遊びに活用させることにより遊びを通しての創作性をやしなう。</p> <p>・うりかい遊びやそれにとまなう他の遊びを通して、協力的な態度を助長する。</p> <p>・うりかいは生活経験をえさせる。</p> |

改正後の経験と目標

経験

経験に対する目標

なつやすみがすんで

1. 幼稚園生活に再び順応させ、規律正しい生活態度を身につけさせる。
2. 自主的に友だちあそびができるように仕向ける。
3. 夏休みの経験を言語、絵画、リズムに活発に表現させながら、これらの生活態度を身につけさせる。また音楽をよるこんで聞いたり、奏したりするようにする。(二年年長)
4. 遊びを通して二、三人以上が遊べるように仕向ける。(年少組は除く)
5. 人に迷惑をかけないように気をつけさせることにより、社会生活態度を養う。

どうぶつえん

1. いろいろの動物に興味をもたせ、動物には種類のあることを知らせる。
2. 動物を絵画製作、音楽リズム、お話、劇あそび、などに自由に表現させることにより、表現能力をやしなう。
3. 動物園の共同製作、および動物園の公開により、協力的態度を養い交友関係を深める。(年少者を除く)
4. 自由な表現を楽しみ、友だちと共に作ることのよろこびを味わう。(月刊カリキュラムより)
5. 紙芝居や幻灯を見たり、劇や、お話あそびを通して、創造的な言語発表へ導く。

うんどうかい

1. いろいろの競技のきまりを理解させ。協力的に参加する態度をやしなう。
2. 全体とする体操やリズム遊びも、たのしくリズムカルにできるように導く。
3. 落ち着いた話を聞いたり、製作する態度を養う。
4. 力いっぱい元気で活動するようにする。(学芸大より)

えんそくのりもの

1. 園外保育を通して自然に親しませ、健康の増進をはかる。
2. いもほりをしたことから、秋のみのりを知らせる。
3. いろいろな乗り物に関心をもたせる。
4. 人に迷惑をかけないように気をつけさせ、協力的な生活態度を身につけさせる。
5. いろいろな遊びから、働く人に対する感謝の念をやしなう。

が達成されたもの A_y = 未だ達成されないもの

第 2 表

昭和 30 年度目標の検討

| 月 | 改正前の経験と目標 | | 実施後の適否 | | | | |
|-----|-------------------------------------------------|------------------------------------------------------------|------------------------|------------------------|------------------------|-----------------------|----|
| | 経験 | 経験に対する目標 | A組 | B組 | C組 | D組 | 適否 |
| 9月 | なつやすみがすんで | 幼稚園生活に再び順応させ、規律正しい生活態度を身につけさせる。 | A _x | A | A _y | B | ○ |
| | | 自主的に友だちあそびができるように仕向ける。 | A _y | A | A _y | A | ○ |
| | | 夏休みの経験を、言語、絵画、リズムに活発に表現させながら、これらの生活態度を身につけさせる。 | A _x | A | A | B | ○ |
| | おうちごっこ | おうちごっこのあそびを通して二、三人以上が協力して遊べるように仕向ける。 | A _y | A | A | C | ○ |
| | | 人に迷惑をかけないように気をつけさせることにより、社会生活態度を養う。 | A _y | A | A _y | B | ○ |
| | | 秋の自然にふれさせ科学的な興味を助長する。 | A _y | B | A | A _y | ○ |
| | | 紙芝居や幻灯を見たり劇やお話をさせ、あそびなどを通して創造的な言語発表へ導く。 | 9-3 A _y | 9-3 B | 9-3 A _y | むり B | |
| 10月 | どうぶつえん | (園外保育を通して自然に親しませ健康の増進をはかる) いろいろの動物に興味をもたせ動物には種類のあることをしらせる。 | A _x | A | A | A _x | ○ |
| | | 動物を絵画製作、音楽、リズム、お話、劇あそびなど自由に表現させることにより、表現能力を養う。 | A _y | B | B | A _y | ○ |
| | | 動物園の共同製作および動物園の公開により、協力的態度を養い、交友関係をひろめる。 | 10-3 A _y | 10-3 A _y | 10-3 A _y | C | ○ |
| | うんどうかい | いろいろの行動が機敏にできるように。 | | | | | |
| | | 走る、とぶ、投げる等の運動を通して身体の発達を図る。 | 年間 B _y | 年間 A | 年間 A | A _y | |
| | | いろいろの競技のきまりを理解させ協力的に参加する態度をやしなう。 | 10月 A _y | 10月 A | 10月 A | B | ○ |
| | | 全体でする体操やリズム遊びも楽しくリズムカルにできるように導く。 | 10月 A | 10月 A _y | 10月 A | 10月 A _y | ○ |
| | 落ち着いて話を聞いたり、製作する態度を養う。 | 10月 A _y | 10月 A _y | 10月 A _y | 10月 B | ○ | |
| 備考 | A=適当なもの B=時期を考慮するもの C=不適當なもの A _x =目標 | | | | | | |

第3表 保育実施の経過

| 経 験 | お 店 一 期 間 | 12月1日～12月14日 | 小 松 組 | (一) 年 保 育 |
|-----------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------|-------|-----------|
| 選 沢 の 理 由 | この頃になるとクリスマスセール、暮の町など何となく落着きがない状態になる。子どもたちも巻き込まれるこうした雰囲気 の早く回ってくるこの地域にあって、子どもたちの遊びも前経験中の八百屋さんごっこに時計屋おもちゃ屋など出てくる程お 店ごっこに興味を示しているので、これを取りあげ共通な興味からグループで協同的な遊びをし、自主的な欲望のもとにいろ いろな品物にも関心をもち、作って遊ばせることにより高め独創性をもたせたいと思いいこれをとりあげた。 | | | |
| 目 標 | ○よろこんで自分から進んで創作するように。 ○創造的な製作をする。 ○8人位のグループで話しあい、一つの目的のもとに創作し行動できるように。 | | | |
| 展 開 の 概 略 | おもちゃ屋を重点として発展させるつもりであったところ、テレビ、下駄、帽子、などがつくられ、子どもたちがそれぞれ思 い思いのものを作ったためお店には品物がたくさんあり、ごっこ遊びをするのに一人では沢山の品物ができないことが話し 部屋の中、五つのグループができて帽子屋、本屋などそれぞれ自分たちでできめられたお店屋の品物をつくり、用意ができた。一日、 部屋の好きな所にお店を作り品物を並べてお互い(グループ)買ひに行ったり売ったりして遊んだ。 | | | |
| 展 開 の 概 略 | 画用紙、のりなど教材が一時切れていたところからワラ半紙で絵本をつくり、新聞紙で帽子を折れると折方を教えてあげた(一 人の子どもに話しながら折ってかぶせて見た)ところからこれに興味に移り、一日にして大部分できた。お店ごっこという ところから「銀行屋さん」になるとお金つくりが始まり一方はテレビを作りたいので以前に作って遊んだ虫籠を出しセロハンをど 灯をつくり、たまたま節の紙を持って来たところから盛に節が作られていたので以前に作って遊んだ虫籠を出しセロハンをど つてわたしたところ袋にこれをつめたり、うすい箱に入れて箱詰ができた。以前に作って遊んだ虫籠を出しセロハンをど 虫めがね下駄などを作っていた。その日全員集まりいろいろできた品物について話し合った折、立体的に自分で考えついた品 物を誰の助けもかきらずに作った子どもをほめたところから独自の創作がされるようになった。これによってお互いのお店屋さんが ところがあまりばらばらな感じがあったので、全員で話し合いをする。これによってお互いのお店屋さんが盛に盛になった。必 要な品物をつくりをした。進んで品物つくりが行なわれたが、作ることの興味が失せ、ごっこ遊びに興味に向いてしまったところ で銀行のグループからお金をわけてもらい、かばんを描き、積木、机を組立て、ごっこ遊びをした後、品物を家に持ち帰った。 | | | |
| 展 開 の 概 略 | グループで話し合いをし、その目的にそって行動がとれるようになり、喜んで製作し工夫して、作る喜びをもたせることに努め た。作られる玩具は子どもたちの身に直接ぶつかってできるもの、また子どもたちの中に遊ばせるもの、子どもたちが後まじり べるものになるようにと思いたちが自由に直接ぶつかってできるもの、また子どもたちの中に遊ばせるもの、子どもたちが後まじり つかわぬように、新しい紙でなく利用できるものを見つけた。そこから何かを作るように考えようにならされた。紙を粗末に扱 つ注意し子どもたちの努力を見落さないように努め、それを認めて誉め、さらにそれからも何か工夫して作ろうという意欲をも つようにし、またそれを見せ、話ししてあげながら作りたくも気がつかない子どもも目を広めるのに役立つようにした。 | | | |
| 留 意 点 | グループ活動は思いの外まっとうで、後になって話などしたが、もう自分はこのお店屋になるという考えからぬけない程であった。 きによって製作させたいと思いい、後になって話などしたが、もう自分はこのお店屋になるという考えからぬけない程であった。 このグループを先に作ってしまったことか、何か網を投げて活動する面では失敗だったがと後悔する気持がある。なぜ本場の創造性を 養う面からはどうであったろうか、何か網を投げて活動する面では失敗だったがと後悔する気持がある。なぜ本場の創造性を 験を通して子どもたちは本当にどんな子どもも独創性をもち、すばらしい創作力を持っているということをしみじみと感じた からである。それは子どもたちの興味にびつたりしており、あの子どもの自由な創作力を持っていたら、何時間も回しても好き な玩具をつくり、それは子どもたちの興味にびつたりしており、あの子どもの自由な創作力を持っていたら、何時間も回しても好き と作らせたと思いい、同じものを作るといっても決して作らない、一人の子どもの作るテレビ、写真機、幻灯、皆その都度 | | | |
| 評 価 | グループ活動は思いの外まっとうで、後になって話などしたが、もう自分はこのお店屋になるという考えからぬけない程であった。 きによって製作させたいと思いい、後になって話などしたが、もう自分はこのお店屋になるという考えからぬけない程であった。 このグループを先に作ってしまったことか、何か網を投げて活動する面では失敗だったがと後悔する気持がある。なぜ本場の創造性を 養う面からはどうであったろうか、何か網を投げて活動する面では失敗だったがと後悔する気持がある。なぜ本場の創造性を 験を通して子どもたちは本当にどんな子どもも独創性をもち、すばらしい創作力を持っているということをしみじみと感じた からである。それは子どもたちの興味にびつたりしており、あの子どもの自由な創作力を持っていたら、何時間も回しても好き な玩具をつくり、それは子どもたちの興味にびつたりしており、あの子どもの自由な創作力を持っていたら、何時間も回しても好き と作らせたと思いい、同じものを作るといっても決して作らない、一人の子どもの作るテレビ、写真機、幻灯、皆その都度 | | | |

第1表 経験(単元)比較表

| 参考 経験 月別 | 保 育 ノ ー ト | 東 京 都 | 月刊カリキュラム | 学 芸 大 学 | 四 谷 幼 稚 園 |
|----------------|-------------------------|----------------|-------------------|-------------------|------------------|
| 4月 | 新しい友だちと先生 親たちの友だちと先生 | 楽しい幼稚園 友だち | 集団生活の楽しさ 楽しい規律 | 新しい友だち 楽しい集団生活 | たのしいようちえん 友だち |
| 5月 | 子どもの成長と母親 | お元気に 遊ぶ | 丈夫なからだ 楽しむ | 雨ふり 楽しむ | お元気に 遊ぶ |
| 6月 | 自然とまじわり | 時夏を 迎える | 丈夫なからだ 楽しむ | 雨ふり 楽しむ | お元気に 遊ぶ |
| 7月 | 夏のあそびと休息 | 夏のあそび 楽しむ | 夏を楽しく 遊ぶ | うれしい夏 楽しむ | 七夕をかざりましょう |
| 8月 | 夏のおあそびと休息 | | | | |
| 9月 | あらし・花・虫・月など | 楽しかった夏 自然 | 友だちと一緒に 遊ぶ | 運動物 楽しむ | 夏のおあそび 楽しむ |
| 10月 | | 運動会 | 協力する子ども 楽しむ | 運動物 楽しむ | 夏のおあそび 楽しむ |
| 11月 | みのりの秋 | いきものを かわいがる | 豊かな心 楽しむ | のりものあそび 楽しむ | のりものあそび 楽しむ |
| 12月 | 社会と子ども | 年の暮とお正月の 支度 | 子どもと社会 楽しむ | 楽しい子ども 楽しむ | お正月のあそび 楽しむ |
| 1月 | 成長と自覚・共同あそび | 楽しいお正月 楽しむ | 創造する子ども 楽しむ | 冬のあそび 楽しむ | お正月のあそび 楽しむ |
| 2月 | | おみやげ 楽しむ | しっかりした心 楽しむ | 冬のあそび 楽しむ | 冬のあそび 楽しむ |
| 3月 | | おみやげ 楽しむ | 成長をよるこぶ 楽しむ | 冬のあそび 楽しむ | 冬のあそび 楽しむ |

幼稚園で嬉々として活動する子どもの姿を見ながら、ひとりひとり良き個性を伸ばして力強い人間に成長して行つて欲しいと思う、人と人との結び付きを快いものにして得るパーソナリティ形成への祈りをこめて……だがその中には教育上からみて歪んだ姿を持つものや、将来子ども自身苦しい思いをしなければならぬような「問題を持つ子」をかなり発見することができる。いかなる親も良い子どもであつて欲しいと願わない人はいないはずなのにどうしてこういうことになるのだろうか。性格は、幼児期に大体方向づけられるというが、可塑性の高いこの時機の誤つたしつけ方は、あとになるに従つて直すのに困難の度を増す。家庭のしつけの面で迷いを持ち真剣に解決を求めていられるお母さん。幼稚園、保育園で級の運営を円滑に進めて行きたいと願う先生方にこの本の一読をお薦めする。おとなの世界と子どもの心理の世界とは質的に異なるものであり。またおとなが考える程感情も単純ではない、ということをもう誰もが知つていて良いはずであるのに実際の生活の中ではそれがうまく処置されず、うっかりしている間に困つた行動に發展していき、可愛い／＼と過度の保護を加えて子どものためによかれと信ずる心が逆に性格を

弱める結果となつて、ちよつとした欲求不満にもすぐ泣き出す適応異常の子どもを生んでしまふ。そうした失敗はどこに起因し、どうしたら良いかを、一日も早く見究めて矯正への努力に向いたい。著者も「はしがき」で言つておられるように、この本は常識的なしつけ読本でなく問題行動の臨床心理学的解釈であり、科学的な解決への

●●●●● 書 評 ●●●●●

品川不二郎著

「幼児の教育相談」

—— 一日も早い
問題解決への指針 ——

郡山女子短期大学

定方とく

●●●●●

メスの役割を持つている。情緒に関する問題、社会性に関する問題、知能と能力に関する問題等について、豊富な事例をあわせて理論づけ、徴候、原因、適切な処置を冷静で適切な目をもつて、良い解決法が見出せないで、ずるずると押し流されたりおろおろしている母親たちへ温く語り合うような態度で一つ一つわかりやすく説きあかし

てくれる。ひとつの原因から全く異つた徴候が現れることもあるし、その逆の場合もある。両者の関係を正しく把握することが必要で、表面的な徴候に目を奪われて根本的な原因の処置を行わないなら、問題はいつ迄もどうどう巡りをする外はないと、「しろ」との生兵法を警告している。親は子どもへの理解を正しく持ち、細心の注意と温い愛情で優しく子どもを包む一方（或る時は）子どもの対人関係や、自分をも第三者の眼で、客観的にみるべきであるという。情緒の未成熟から社会生活が円滑に行かない子は、親が思い切つてどんな子どもの中にも我が子を突き離してやろうと決意すべきだとのことばも多くの示唆を含んでいると思う。この本をおかあさんだけでなくおとうさんおばあさんやおじいさんが読んでくれたらどんなに良いだろう。もちろんこれだけでうまく行くとは思えないが、家庭という力学的な場で、皆が協力して問題解決の努力をしたら現在より多くの光が、皆の心の中にさし込むに違いない。

* * *

子どもの印象からみた親への 理解と要求

室谷 幸吉

〈例・1〉

うちのおかあさんは、なにかっていうとぼくのせいにはしません。勉強をすこしでもやらないとおこります。おかあさんは、あわてんぼうです。ごはんがこけても、よその家だとおもってこがしてしまいます。

そこで、ぼくたちがねているとき、おかあさんはすぐおこします。ぼくは、おかあさんに、「まだ六時じゃあないの」というと「あ、そうだ」といってふとんにはいる。ぼくがテレビをみると、いけなしいって、つれていってしまいます。おかあさんは、ぼくがよりみちをしないうっていても、よりみちしたという

おこります。

おかあさんは、ガがきらいです。ぼくが新聞がみにガをつつんで、おかあさんのところへいってみせると「ワッ」といってげていきます。とてもおもしろいです。

おかあさんはあんみつがすきです。食堂にいくと、あんみつをとります。食

おかあさんは、おばあちゃんのくすりやを手つだっています。

ぼくが帰ると、たいていはいません。

ぼくはおかあさんに、クリスマスに小がたしゃしんきをかってもらいます。

この文を通して、この子が母親と、生活的にどのようなふれ合い、どんななかりあ

いをもっているかが、ある程度うかがえる。

すべての子どもらにとって、母親は「心の支え」であり、父にも増して「よき人」であろう。そうであることが望ましい。だが、それは母に対する無条件肯定などというアマイものではないようだ。その人を慕いつつ、その人に心ひかれつつ、慕うがゆえに、心ひかれるがゆえに、なおさら他面では、さまざまな批判や要求を、その人に向かつて抱いている。

前の一文でもよみとれることだが、子どもは母に対して、相当肯定的であるとともに、また相当に否定的でもある。母との間に、生活行動を通して、かなりの緊張状態や問題点をもっている。

子ども自身の立場や、真意を正しく汲みとっていてくれない、母親の独断的・一方的態度に不満のことはをもらしている。(カベをよごすのはぼくではないのに、ぼくがよごしたんだときめている。学校帰りにヨ

り道なんかしないのに、ヨリ道して来たと勝手にきめている)勉強に干渉する口やかましきにも反発姿勢をほのめかす。

——ああだこうだとぼくにうるさく干渉するおかあさんにだつて、しくじりはあるぞ……と、逆にやりこめる。復讐めいた心の動きでそれみたことかと、母の失策や弱点をひろいあげる。(こはんのこげるのをトナリの家のこととまちがえたり、時間を見誤つて早く起こしたりというそそっかしい)そこらに、「あまりえらそうなことはいえませんが」という反撃の気配が感じられる。

親という地位の前でも、子どもは必ずしも無力なものではない。

今日の子どもが、自分たちの親を、どのように理解しているか、また親に対して、どのような欲求や不満をもっているか等、一般に、親に対する子どもの姿勢に批判的態度といったものを観察することは、今日の子どもを正しく理解する上に、欠いては

ならない大事な手だてである。

しかも、こうした追求は、単に今日の子どもの感情や行動の傾向を浮き出させてくれるだけではなく、家庭内における、時代に即応した人間関係の樹立、新しい家庭秩序を作りあげるための出発点を明らかにしてくれるものでもある。

私は、六歳の男女約百人(幼稚園卒業期から、小学校初学年にかけての一般情勢がうかがえよう)についての、概数二百篇にわたる親への印象記録を入手して、それについて検討を加えてみた。それをとりまとめたのが、この報告である。

子どもたちの家庭は、主として東京山の手(武蔵野市・三鷹市・杉並区・世田谷区)にあって、中流の生活をしており、なおその九割ほどは、会社勤めのサラリーマンであった。

ここに、家庭内の人間秩序を考察する上に問題視される点が、いろいろ浮き上ってきた。その二、三について所見を略記しよ

う。

★

「あなたのおとうさんは？ おかあさんは？」と、話題が両親に及ぶとき、子どもたちが、ふっと思ひうかべる両親の姿——自分の母らしい、自分の父らしい、特長的な行動は、一人につき平均して二項目ぐらわずつある。(印象点の総括平均からそのことはわかる)

子どもらがあげた父母の印象的行動は実にさまざまで、多岐にわたるが、一応これを、つぎの八つに類別することができた。

- ・父と母との対人関係に目を向ける。
- ・自分に対する父母のシツケ・態度に目を向ける。
- ・父母の親切さに目を向ける。など(次頁の表参照)

さて、この八つの対象領域について、子どもらの関心の集中状態を見ていくと、父親については——

物品購入に関与する人としての関心が最

父・母に対するこどもの印象

| 印象方向 父 母 男 女 別 | 父と母との 対人関係を 向ける | | 自分と母との 関係に目を 向ける | | 父母の親 切さに目を 向ける | | 物の贈与 に目を向 ける | | 父母の働 きに目を 向ける | | 父母のクセ (主に短所) に目を向 ける | | 父母への 願いや批 判をもつ | | 服装やそ 他の雑行 為に目を 向ける | | 一人当り の印象事 項数 | |
|-------------------------------|-----------------------|-------|------------------------|-------|----------------------|-------|--------------------|------|---------------------|-----|-------------------------------|---|----------------------|---|-----------------------------|---|--------------------|---|
| | 男 | 女 | 男 | 女 | 男 | 女 | 男 | 女 | 男 | 女 | 男 | 女 | 男 | 女 | 男 | 女 | 男 | 女 |
| 父につき | 男 | 36.9% | 15.8% | 21.0% | 57.9% | 21.0% | 31.6% | 5.3% | 10.5% | 2.0 | | | | | | | | |
| | 女 | 15.4 | — | 53.9 | 69.3 | 7.7 | 15.4 | 15.4 | 15.4 | 1.9 | | | | | | | | |
| | 平均 | 26.2 | 7.9 | 37.5 | 63.6 | 14.4 | 23.5 | 10.4 | 12.9 | 2.0 | | | | | | | | |
| 母につき | 男 | — | 18.8 | — | 56.2 | 75.0 | 6.3 | 12.5 | 6.3 | 1.8 | | | | | | | | |
| | 女 | 21.4 | 7.1 | 7.1 | 42.8 | 35.7 | — | 64.2 | 28.6 | 2.1 | | | | | | | | |
| | 平均 | 10.7 | 12.9 | 3.6 | 49.5 | 55.3 | 3.2 | 38.4 | 17.5 | 1.9 | | | | | | | | |
| 総平均 | 18.5 | 10.4 | 20.6 | 56.6 | 34.9 | 13.3 | 24.4 | 15.2 | 2.0 | | | | | | | | | |

も大きく、第二は、父の自分に対する親切さ、(ことに女の子にこの傾向が強い) 第三に、母に対する行動、(主に夫婦ゲンカの際をとる) ついで、父のクセ・父の仕事ぶり等となっている。

母については、父への印象度とは順位にかなりのズレが認められる。すなわち、母の働く姿についてがトップに、二位が、父の場合首位にあった、物の贈与者としての母、三位が批判に基く母への願いや訴え(父の場合は第七位)となり、ついで母の服装や日常雑行為に対するもの、さらに、自分へのシツケの態度、父に対する人間関係(主に夫婦ゲンカで、父の場合はこれが第三位。夫婦ゲンカについて母親は受身の立場にあるのであろうか)等となっている。

父母をひっくるめてみると、首位は物品贈与者としての親であり、二位は働く親の姿。そして三位は批判的な親への願いとなり、以下、父母の親切さ、服装や雑行為への印象、父母の人間関係(夫婦行動)、父母

のクセ、自分へのシツケの態度等に、それぞれ強い印象をいだき、それから広く深い人間的影響をうけつつあることがうかがわれる。

〈例・2〉

うちのおかあさんが、そうっと、ぼくにわからないようにおかしをたべています。すぐぼくにみつかつてしまいました。それで、ぼくが「ずるいぞ」というとわらいます。ぼくが勉強をして、本をよんでいると、おかあさんがへただよという。そうするとぼくは勉強がいやになります。

この子は、母のちょっとした行為に、きびしいことばで抗議している。(実は、この子の母は持病の胃下垂で、その病気ゆえに、食事の時間を平常通りにキチンときめておくことができず、空腹を感じたとき、何かでうめておかないと、苦痛にたえられないという特殊事情があるのだが……)

このように、親の行為に、批判的な目をむけ、善悪の評価づけをし、さて、「だからこうしてほしい」「こうする方がいいと思

う」と、願望の形で、ことを親になげかける——といった傾向は、男の子より女の子にあきらかに強い。すなわち父母につき男子は八・九%なのに対し、女子は三九・八%と高率である。

しかも父に対する批判願望より、母に対するそれの方がはるかに多い。すなわち母の行為に対する批判願望率は、男の子の場合でも父へのその二倍半、女の子の場合では、実に四倍強という数字を示している。

たとえばこうだ。

・おかあさんはハルヨ（妹）ばかりめんどうみて、わたしのことかまってくれない。わたしのこともめんどうみてほしい。

・弟ばかりかわいいがる。

・わたしがお手伝いするといっても、女中さんがいるので、おかあさんは手伝わせたくない。

・おかあさん、私の洋服ばっかり作らない

でちょうだい。私モッチャんにいじめられるから、私のばっかり作らないでネ。
・朝六時に起こしてネって、たのんどくに、ねてておこしてくれないの、こまります。

・ピアノのおけいこにくる人にはとてもやさしいのに、私にはやさしくない。おけいこにくる人にするように、やさしく話したりしてほしい。

・おかあさん、おとうさんみたいにふざけてください。

・すぐ私の貯金かしてというのでいやだ。

——以上は、母に対する女の子からの願望。その女の子が、父親に対しては、

・おとうさんはケチンボだ。なにかたのんでも買ってほしい。

・妹にしつこくするのはイヤです。

といった調子で、父に対しては採点があるまい。

・おかあさんは、おばあさんよりずっとこ

わい。おばあさんみたいにやさしくして……。

・あわてんぼでこまります。

男の子から母親への願いはこんな具合で低調だ。父に対しても同様である。

女の子の姿勢には、どうやらシット的な色あいがうかがわれる。女性特有の感情を主とする生活の動きや物の理解の仕方などが、自然にこういう現われをしているのだと思う。

★

〈例・3〉

おねがい。パパとママとけんかしないでね。いつも私は、けんかがはじまるとママのみかたになってけんかをしています。そうするとママがいいです。「とうちゃん、よしなさい。ミツ子よしなさい」といいます。マクラをなげたり、ネマキをなげたりします。

父が母に対し、母が父に対する人間関係が攻撃的行動・対立行為（夫婦けんか）の形で、子どもらの心に、強い印象を刻みつけていることは注意されねばならない。

いったい、ゆたかな人間愛にもとづく夫婦の協力生活が、子どもらの身边で行われることが少ないのではなからうか。

一時の激情にかられた親のはしたない姿は、子どもの目に止められて、何の効果もないものだ。効果どころか、いたずらに子の胸の中に不安の波をわきたたせ、親へのケイベツ感を誘起するだけに終る。

夫婦ゲンカは、子どもらの目にふれぬ場所、子どもにも影響を及ぼさぬ形で行う、という忍耐深いルールを、夫婦間に設けることはできないものか。これは世間の親の良識にかかわる問題である。

★

物品の贈与をうけた感激や喜悅によって、親への印象を深めていることは、まことにはほえましい。これは、生活的に親への依存期であり、経済的には無能力に近いスネカジリの存在者として、むしろ当然のことでもある。

「王様の子でも食につく……」心ひかれる

のは、しかし食いものばかりではない。

・エンピツ・エンピツケズリ買ってね。

・クツを買ってください。

・るすばんをしているからパンを買って

ね。

・オデンを買ってほしい。

・本買ってもらってうれし。

・動物園へつれてってほしい。(以上男の子

から母へ)

・下ジキ・ぼうし・けしゴム買ってね。

と父親の心につき。子どもらのこの種のオネダリは、母親に向かってより、

一般に父親に向かっていいやすいように見

うけられる。男の子の場合は、父に対して

も母に対しても、ほぼ同数の率(五六―五

八%)を示しているが、女の子の場合に

は、母親については四三%、父親について

は六九%と相当父親の方へ濃厚な傾斜を見

せている。子どもにとって、おかあさんの

財布のヒモは、なかなかとかせにくいもの

のようだ。

・るすしていたのでハンカチ二枚・アメ・
チョコレートをもらった。

・オモチャをかってください。

・お人形を買ってね。

・長クツと、マンガ本買ってよ。

これは女の子から母親へのおすがり。ま

た女の子から父親に対しては、

・お金をくれるのでうれしい。

・おまんじゅうを買ってください。

・映画につれてってください。

・アメを買ってください。

・手帖やチョコレートくれます。食堂に

いってアイスクリームやそばをたべさせ

てください。

・クレパスを買ってください。

・本や千代紙人形を買ってください。えんそ

くにはキャラメルやリングを買ってくれ

ます。

といっている。

★

・足をケガしたとき赤チンをぬって手あて

してくれて、親切なおとうさん。

・スリキズしたとき、おとうさんはすぐ救急箱もってきてくれ、手あてをしてくれました。

・赤・青のエンピツを買ってきて、ぼくのねているマクラ元においてくれた。

・おかあさんがいなかったとき、ドブにおちたぼくのクツを洗ってくれたりした。

と、自分に対する父の親切さに感動している子が、男では二一%。

・おとうさんは私をタッコしてねてしまう。

・ネマキを着かえさせてくれます。

・おとうさんは私にとってもやさしい。

・病氣したとき、おとうさんはオブラートに薬をつつんでのませてくれた。

・カゼのときなんか、よくせわをしてくれます。

・「早くねなさい」と気をつけてくれる。

・おかあさんがねていると、おとうさんは自分でいつも雨戸をあける。親切なのが

すきです。

など、女の子では五四%ある。

ところが、母に対してのそれは、わずかに女の子に七%あるだけで、驚くほどに少ない。(おかあさんは、私にやさしいです)

これは、いろんな点から検討に値する現象だと思う。

★

父母の働く姿に対する印象は、必ずしも「深くして強い」とはいえない。生活の在り方として健全なものとはい切れない。

母の働く姿から強い印象を受けている子

は、父についてのその約四倍(五五・三%)あるが、

・おかあさんはいつも着物をぬつている。

・いつも電気洗たく機で洗たくしている。

・弁当作ったり、そうじやせんたくでおか

あさんはたいへんです。

・ごはんのしたくでつかれるでしょう。

・あみものばかりしています。

・うんといそがしくてくたびれるでしょ

う。

・おふろたきをしている。(以上男の子)

・学校から帰るといつもぬいものして

る。

・洋服を作っていてせわしそう。

・お弁当作りやそうじやせんたくでたいへんです。

・日比谷の会社についてお菓子屋をしてます。

・とてもせわしいです。(以上女の子の印象)

ということばにうかがえる通り、九分九

厘までは、直接生産活動とはいえない、こまごました家事労働に限られている。

一般に都会の子らは、真剣な勤労場面、

家族の火の出るような生産労働の場面に接

することが少ない。そういう切実な人間生

活の最前線にふれる機会に恵まれない。家

庭内職などを必要としない階層の子ともで

はなおさらである。したがって本当の意味

の勤労や労働——人間として最も必要な、

それなしには人生の意義を失うところの、切実な職業活動に対する認識は皆無に近く、それへの意識や関心はおそろしく低調である。これは子どもの精神生活にとり大きな不幸といえる。

都会の子どものための人間成長にとって大きなマイナスである。そしてこれは、しばしば償い難い、心の傷を生みだす源ともなっている。

子どもの家が、商店である場合でも、商人である親たちは、つとめて子どもを自分の店から遠ざけようとする姿勢を示す。

「なにしろ、店の方は人の出入りがはげしく、あわただしいものですから、おちついて勉強などしちゃいけません。なんとか、そのうち、つごうして、静かな住宅地に住居をみつけ、子どもらをそっちに移したいとは思ってるんですけど……」と、その父親、その母親たちが、これこそは最上の策といった顔つきでおっしゃる。

くだもの屋の店で、そば屋の店で、電気

器具の店で、なぜ子どもらの目と手と心を、店を中心とする商行為に参加させることによつて（もとより行き過ぎは警戒しなければならぬが）たくましく賢く生かそうと心組まないものであろうか。まことに解

せない親心である。学問に対する古風なかたよった観念が、親心の正しい発現をあやまらしめているといつてはいいすぎであらうか。

オトナが唯一の「憩いの場・遊びの場」と考えている家庭に、勤労を通してのみ味わわれ理解される人生の厳肅さ、生命の充実感などを、引き入れる工夫はないものか。

家庭の「望ましい秩序」は、この面からも痛切な今日の問題として検討されなければならぬ。子どもらの将来の幸福を考えれば考えるほど、親である私たちにとつて、これは努力と工夫とを要する大問題であらう。

・おとうさんはぼくの頭をゲンコツでゴリゴリするのでいやだ。

・おふろにはいらぬというところごとくハダカにしてむりやり入れる。（以上男の子から）

父親の自分に対するシツケ方については、ある。これが母親に対してのものでは、

・おかあさんは手紙をかいてるとき、ばくがあげられるとすぐおこる。

・勉強しないととうんとおこる。

・テレビを見るなといつてうるさい。（以上男）

・弟をいじめるとひどくおこります。（女）
といった調子である。

つぎに父と母との対人関係について、三ひろつてみよう。

・おとうさんの帰りが遅いと、おかあさんはサツサとねてしまいます。するとおとうさんは帰ってきてうんとおこっています。

・おとうさんは、お酒をのんでよっぱらっ

て帰る。そしておかあさんのことしかつていません。

・ばんごはんがおそくなると、おとうさんはすごくおこります。

・おこると障子を破り、茶ワンを投げつけます。(男の子の目に写った父)

・おとうさんはときどきおかあさんとケンカします。

・茶ワンやそこらのものをなげてこわします。

・マクラやお茶ワンをなげてあぶない。

(女の子の目に写った父——)

それが母の側から父への手出しとなる
と、

・おとうさんと映画にいき、帰りがおそいとおかあさんはしかります。(女の子) といった工合に激しさが減っている。

★

子どもにしてみると、両親は、それこそ「理想の人」であらう。

「父のごとく」また「母のごとく」ありた

い……と、子どもに願われる親でありたいというのが、これまたまじめな親たちの願いではあるまいか。

なんとかして子どもらの期待にそむかない親でありたいと私は思う。

親の服装や雑行爲について——

・おかあさんは毎日十時にねないと眠れない
いそうで、十時になるとチャンとねます。

・私のおかあさんはいつも着物きています。

・パーマをして伊勢丹へいきます。(以上母へ)

・家ではいつも着物ですが、会社へいくときは洋服にかえます。

・小さいとき本をよみすぎてメガネかけたそうだ。(以上父へ)

(筆者は明星学園教諭)

越年の言葉

平安短大保一 B A子

(前略) 今、こうしていると、思い

出されるのは、始めて幼稚園へ参観にいったときのことである。「子どもの世界」は清く、美しい。私は、あのときの空気の味を、今もはっきり思い出される。このようなどころで働ける私は幸福である。

私はしばらくの間思いにふけり、除夜の鐘で我れに返った。一つ、二つ、……一九五六年は、鐘の音に乗って消えていく。それにつれて、私の心は、希望に燃えてくる。

〔鑽〕流れいくリズムに乗り切ってその中に没入した極、自分の意識が無くなったところからその流れの起源に還(かえ)らせて、曆の上の越年を真に新しい躍進として踏み出し立ち直る「道」が立つのである。毎朝地球上に新しく生れて来たような幼な心に、元日はみんなが立ち還るから、「おめでとう」と祝祭の清気が漲り、内心にあかりマタイ伝がとも六ノ三二が点る。

(三三、二、一八、夜十一時) 大塚喜一記

記録を通し子どもを理解するには

お茶の水女子大学

小口 忠彦

わたくしは、以前、評価に関して、その基準をABC三段階に区分するのはよいとしても、各々を、クラス全体の子どもたちの何人と機械的に人数で決める評価の仕方に疑問をいただき、環境の変化によっても容易に変わらないような望ましいものならばA、逆に、容易に変わりそうもない、望ましくないものならばC、環境の変化によって、よくも悪くもなる不安定なものに対してはB、とするのがよくはないかと、述べたことがある。記録が問題になるのは、主として、評価がBの段階の子どもを理解する場合である。(臨界観察)の記録がとつ

てあれば、子どもを理解するために役立つが、ふつうの記録だけで子どもを理解しようとするのは、早計であろう。ふつうの記録には、その限界というものがあることを、常に考えている必要がある。

また、記録には、行動観察の記録の他に、知能の記録、家庭環境調査の記録などがあり、成長しつつある子どもを理解するためには、これらの記録を総合的に活用する必要がある。

次に、知能・情緒・社会性などに関して、大切なことがらのいくつかを、ひろいだしてみよう。

1 知能・言語活動

一般に、知能の高い子どもは、ことばが早く発達する。しかし、ことばの発達がおくれているからといって、必ずしも知能が低いとは限らない。ふつうの子どもなら、

三、四歳になると、ことばの急速な発達がみられるが、友だちとあそぶ機会に恵まれている子どもや、おとなの間で生活している子どもは、概して、年齢の割合によくことばが話せる。子どものことばの発達は、社会的環境の影響を受けるから、言語活動が活発だからといって、必ずしも知能が高いとは限らないし、余り話さなくても、知能の高い子どももいる。知能・言語活動・家庭環境調査の記録を関係させてみるようにしたら、たしかに、子どもを理解するのにやくだつた。

ここで、知能についての記録で、注意すべきことを述べておこう。知能テストには、ことばがよく話せる子どもにとって有

利なA式と、ことばを使わずに答えられるB式との二種類がある。知能についての記録をみる場合に、A式、B式、いずれのテストによるものであるかを、たしかめておかなければならない。というのは、いま、年齢の割合に、大へんよく話せる子どもがいるとする。A式のテストを受けさせた結果、予想通り知能指数も高かった。しかし、B式のテストを受けさせた結果は、思わしくない、というように、双方のテスト間でクイチガイを生じる場合があるからである。A式、B式の双方を受けさせることが望ましいが、一方のテストを受けさせる場合には、何式であるかが記録に明記されているようでありたいものだ。

2 知能・質問

幼児期のはじめには、意味をもった音声、特に擬音語が、そのまま話しことばであるが、一歳半から二歳までの間で、二語、あるいは数語を連ねた多数語文を用い

るようになる。二歳以後、思想感情を表現できるようにになると、子どもは興味をいだく対象に関して、盛んに質問する時期を迎える。この時期が、いわゆる「質問期」である。質問期は、二歳と三歳の間ごろから始まり、六歳ごろで頂点にたつと、といわれている。子どもの質問は、初めは何をみても「これなあに」「あれなあに」と、たて続けに発する。しかし、三歳ごろになると、「何」という質問であったのが、「どうして」という理由をたずねる質問に移行する。この種の質問になると、ものごとを関係的にみるようにアタマが働いているのであるから、知能と関係があると考えられる。この種の質問が、いつ、どのような場合に子どもの口から出たかについての記録が、知能との関係において読まれるなら、子どもを理解するのに大へんやくだつものである。しかし、質問には、知識を得ようとする質問と、自分では答を知っている、相手が答えられるかどうかをためそう

とする質問とがあることに、留意していたい。これは、質問というかたちをとっているが、ことばによる自己表現の二形式で、対人関係における子どもの「自我」の芽生えを読みとることができる。

3 模倣・反抗

「模倣」、「反抗」は、他の子どもやおとなとの接触の結果現われた、社会的行動である。模倣は、人のやることは自分にもできそうだと、という気持があつて、他の人と同じようにすることである。反抗は、模倣とは対称的な行動である。反抗は、二歳ごろに始まり、四歳ごろで頂点にたつする。この時期が、いわゆる「第一反抗期」である。五、六歳以後、この傾向は次第に減少する。模倣が他の人と同じように行動することであるのに対し、反抗は、自分の思い通りにものごとを通そうとして、大人の要求・命令・権威などに抵抗を示す行動で、強情とか、拒否となつて現われる。模倣と

反抗は、全く関係がないようであり、実は、根は同じものである。つまり、子どもに芽生えてきた自我が、別々のかたちをとって現われたものにすぎない。三歳ごろからみられる「競争」にしても、へげんかにしても、他のものよりすぐれたり、あるいは、自分の所有権をたれからも侵害されたくないという傾向に基づいており、やはり、自我の拡張の現われであるとみられる。

観察記録は、外部に現われた子どもの行動の記録であるから、記録を理解のための手がかりとして用いる際、その受けとり方に注意したい。

とりわけ反抗については、たとえ記録に反抗的と記されていようと、この年齢の子どもでは、反抗的であるのが発達段階からいって、ふつうの状態であり、反抗するからといって、この時期に反抗を余り強く抑えると、青年期になって、意志薄弱になることがある。

4 情緒・社会性

子どもは、自分と自分以外のものを混同し、主観的要求が主となることが多いけれど、それでも、自分を他に適応させてゆくことを学び始める。そして、ある程度、時間を延期することも、また、ガマンするということもできるようになる。「情緒」の発達は、「社会性」と深いつながりをもつ。精神分析でいう「固着」は、そのよい例であろう。固着とは、失敗することや、いじめられることを恐れて仲間から回避し、そのために情緒の発達が未発達のままに止まっていることである。

一般に、この時期の子どもの友人関係は、年齢とともに広がる。仲間と一緒にあそび、お互いに話し、あそび友だちを求めようになる。人数は、三歳では二人くらいであったのが、六歳になると、三、四人になる。しかし、三、四人になると、集団は二つに分れがちではあるが。

子どもの社会性の欠除は、家庭におけるあまやかしが原因である場合が、比較的に多い。一人子、長男、長女というのは、概して社交性が乏しいものである。家庭環境調査の記録は、このような場合、子どもの理解に手がかりを与えてくれる。記録をよく

む際、情緒の発達、社会性の記録を関係づけてみることに、また、家庭環境調査の記録をもこれらと関連させてみることは、子どもを理解する上に、忘れてはならないことであろう。

5 創造性

子どもの「創造性」が現われやすいのは、あそびにおいてであろう。あそびの型は、感官を使ったり、手足を動かしたりする「機能あそび」何かのまねをして想像の世界で楽しむ、いわゆる「こっこあそび」、自分で作ったり、描いたりする「構成あそび」見たり、聞いたりすることを楽しむ「受容あそび」に分けられる。あそびは、年

齡とともに変化する。これらのうち、構成あそびは、一番高度なあそびと考えていいと思う。しかし、その構成あそびにも、多分に想像が混入している。この想像性を、すぐさま創造性とみることは、さけた方がいいように思う。創造性は、表面的な風変わりということではない。子どもが変ったやり方をする。そのやり方が、少くとも、その子どもの過去にみられなかったいい方法であり、しかも、子ども自身が、はつきりした意図をもつ場合についていえることである。

6 基本的習慣

三歳から五歳——この時期は、運動神経が発達し、かなり複雑な行動が可能である。ことばを使って自由に話もできる。だから、やらせればいろいろのことができるはずである。

基本的習慣としての、睡眠・食事・用便・着衣・清潔に関する基礎的なことは、このくらいの年齢なら、身につけていなければならぬことであるから、どの程度できるかを、記録から読みとらなければならぬ。例えば、

睡眠……きまった時刻にねる。よくねむる。一人でねる。

食事……好ききらい。一人で食事する。あそびながらたべる。間食。

用便……一人でできる。用便のときは教える。長くがまんする。便通。

着衣……ボタンをはめる。くつ下をはいたりぬいだりする。洋服を一人できる。きちっときる。

清潔……お便所へいった後で手を洗う。

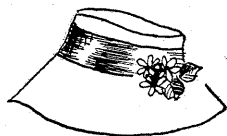
食事の前に手を洗う。はをみがく。

など。

ここにあげたのは、一例にすぎないが、子どもの生活の面で、ここにあげたくらい

の項目については、記録から読みとってみたい。その他、道路の右側を歩くこと、道路の横断、車中の行動など、ぜひとも習慣づけなければならないことが、数々ある。

子どものパーソナリティは、日々の生活を通して形成されていく。子どもを正しく理解するためには、生活のあらゆる面の記録を総合してみなければならぬ。そして、記録する場合、臨界観察にしても、他の形式によるものであっても、少くとも、ここにあげたくらいの項目が読みとれるように記録される必要があると思う。



絵を通して、行動を通して、 子どもを理解するには

東京学芸大学

角 尾 稔

子どもを理解するということが簡単に使われるけれども、これはなかなかむずかしいことである。

われわれは「あの人の心がわかる」とか「あの人の心がわからない」などというが、一体他人の心をどのような道すじをたどって理解しているのだろうか。われわれは、その人間の外部にあらわれた、広い意味での行動を手がかりにして、その奥にひそんでいる心を理解する。つまり、音声とか、ことばとか、表情とか、身振りとか、あるいはこの標題にも出ているような、絵画のような作品を通して理解するのであ

る。

さて外的にあらわれていることから、内的な心を理解するといっても、それには、ある方式といってもいいようなものにあて

はめて、理解しているのである。人によって、この方式を豊かに持っている人と、そうでない人とがある。あるいは、偏狭な人間観といったような色のついた方式を持っている人々は一つ一つの行動から、あやまった推測が行われ、間違った解釈が下されてしまう。

涙を流して泣きじゃくっている人間に対して、悲しい時に涙を流して泣きじゃくる

ものなのだ、という考えしかもたない人は「その人間は、悲しんでいるのだ」と一方的に解釈してしまう。しかし、嬉しい時にも人間は泣くものだと、広い考えをもつ、——つまり、方式をゆたかに持ち合わせている人には、その泣きじゃくっている人間は、嬉しいかも知れないと、正しい広い考えをする。

このように、人間の外的な行動から、内的な心を、誤ることなく推測することができるようになるためには、広い経験をし、それをじゅうぶんに生かさなければならぬ。生きた人間の心をいろいろな人生修業ともいえるような広い体験や読書や研究から、割り出されてこなくてはならないように思う。

さて、こんなふうと考えてくると、ますます困難に思われるのであるが、いくらから系統だてて、人間理解の方法を考察することにしよう。

自由な場面での描画や行動の観察

| | |
|--------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 知的 発達 | <p>4才～5才$\frac{1}{2}$ 人間の表現には、頭と足以上があらわされているか。</p> <p>5$\frac{1}{2}$才～7才</p> <p> { <ul style="list-style-type: none"> 子どもは、頭・胴体・腕・足・顔、以上のものをかくか。 眼や、鼻や、口が示されているか。 顔には、いろいろな表象的な記号が、かかっているか。 </p> <p>以前の描画とくらべて、細部の描写が、増えているか。</p> <p>子どもの描画は、描写的か。</p> <p>いろいろな細部を描いているか。</p> |
| 情緒的 発達 | <p>人や木どか、眼とか鼻といったような概念（表現様式）をしばしば変えるか。</p> <p>概念的な表現にとらわれずに自由か。</p> <p>子どもにとって、重要な部分が、ある程度誇張し過大に表現されているか。</p> <p>永続きがしなかったり、あまりにも誇張した表現があらわれているか</p> <p>明確な線や色で描画作業に対する自信を示しているだろうか。</p> <p>子どもは自分にとって、重要な物事を物語っているか。</p> |
| 社会的 発達 | <p>子どもの描画作業が、はっきりとした経験と、関連しているか。</p> <p>子どもと対象との情緒的な関係によってきめられた秩序が見られるか。</p> <p>空を上にと、地面を下にといった空間関係を表現しているか。</p> <p>特別な環境（家、幼稚園等）に対する意識を表現しているか。</p> |
| 知覚的 発達 | <p>ある空間を示すための線でない線が、使われているか。</p> <p>子どもは、動きや、音を表現しているか。</p> <p>物と色とを関係づけているか。</p> <p>（粘土の塊り全体から、出発して、作り出すか。）</p> |
| 身体的 発達 | <p>身体のある部分をいつも省略することがあるか。</p> <p>身体のある部分を永続的に強調する。</p> <p>子どもの描く線は確とした線であり、生き生きとした線であるか。</p> <p>子どもは、絵に身体活動をとり入れているか。</p> |
| 美学的 発達 | <p>色は、装飾的に決定されたように思われるか。</p> <p>重要な空間が、重要でない空間に対して、うまく配分されているか。</p> <p>主題の組織が、その内容にふさわしく重要に見えるか。</p> |
| 創造的 発達 | <p>独自の概念（表現様式）を用いるか。</p> <p>集団の中で描く際に、他人から影響されずに描くか。</p> <p>子どもが一人で、どんな材料でも自発的に創造するか。</p> <p>子どもが一人である時、模倣的な作品を作ることから遠ざかるか。</p> |

自由な場面というのは、教師の側で特別な条件を設けない場面を指すのであって、このようなとき子どもはありのままの自然な姿を表すものである。描画の場合は格別な課題などを設けない時、あるいは、自由遊びの時間などに、自分から勝手に、自由画帖などに描いている時などがこれに相当する。

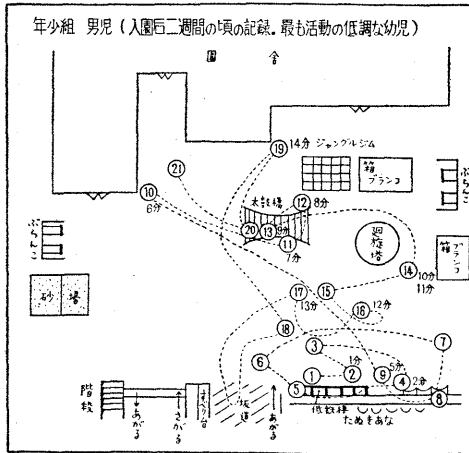
条件分析的な観察の必要

ところで、自由な場面といっても、その時その場の条件というものが必ずあるものであって、そうした場の条件と切り離して、子どもの行動から、その子どもの内面的となるものを推察することは無理である。その時は、周囲にどんな子どもがいたかと、どういふことをしたあとで、どんなことをしようとしていた時だったのかというようなことを考え合わせながらその子どもの行動を解釈しなくてはならない。

描画の場合でも同じである、たとえ教師の干渉のない場面で子どもが描画している

のであっても、その絵にはとらりの子どもや、その時までの遊びや経験や、それまでの教師や家庭のその子どもに対する対し方などとの関連のもとに考えなければならぬ。それだけにかえて一枚の自由画の中からその子どもの生活の背景を読みとることができるのである。

こうした観察眼というか絵の見方を学ぶためには、日常よく注意して、子どもを比較その絵や行動に対して、何か観点を定め



なければならぬわけである。

ローウェンフェルドが、前期図式期の子どもの絵の評価のために示している評価記録表は、絵を通して子どもを知るための見方や手がかりを与えてくれる。

このように、描画にあらわれた特徴をとり出し、それを比較することから、描画にはいろいろのタイプや相違があることが、わかる。そして、得られた描画の特徴を、その子どもの行動と比較することによって、あんな子どもはあんな絵を描くし、こんな子どもが、こんな絵を描いているということがわかるようになる。それゆえ、絵の研究は行動面の研究とあわせて行われなくてはならない。

行動の研究の一つの例を示そう。これは私の受持っている学芸大学の幼稚園科の学生とともに行なったものである。対象となった子どもは一番活動の少ない園児であるが、それも随分歩き



まわっていることがわかる。
一分 鉄棒にさわったり、なでたりして、友だちを見ながら他の棒へ移動する。

二分 友だちに導かれるように走り、たぬき穴をのぞいて、鉄棒に帰る。
三分 鉄棒にじやれるようにして友だちと遊ぶ。突然二人で鉄棒から離れる。そしてスキップをして走る。

四分 たぬき穴へ入って、しばらく出てこない。
五分 のそのそと歩いて、出てくると。⑨の鉄棒につかまったりを眺めている。

六分 急に走り出す。⑩の場所に入ってきた子どもたちの仲間に入る。
七分 たいこ橋の上にあがり、上から友だちを眺める。とびおりにまたあがる。

八分
九分
十分 あきたのか、ぶらぶらと廻り塔の方へ歩いていく。⑭で子どもたちが先生と輪になって歌を歌っている。そ

れを見て急いで加わる。ワットという歓声をあげて四方へ散る。⑮に集まってまた始める。

⑯⑰の場所の上のことを続ける。
十一分
十二分 ⑱で友とふざけてころび泣く。大声で泣きながら、先生につられ
十三分 て⑲ところへいく。

十四分 大声で泣くのをすぐやめて、たいこ橋にまつわりつく。

このような行動場面での観察と同じような行き方で、自由画の観察も行える。できあがった絵と、子どものことばから問題点が拾われる。

「おとうさんをかいたの」といってさし出された上の絵はこの子どもがおとうさんに、対して、どんな感情をいだいているかを示すに十分である。

次の絵を描いた子どもへの説明は、
「この子がおうちにいた時、おあさんがほかへいったの。おるすばんして、おうちのほとけさまにお花あげたの」

というのであった。両親とも職業を持ち、両親から忘れられたような生活をして、いる子どもである。色彩の点でも、花まで

青で描かれているくらいで、ほとんどが冷色系の色でできている。

このように、自然な行動や、自由画の観察は、他の子どもとの相違を発見することにより、問題点を発見する糸口になるものである。

しかしながら、このような程度に問題があるらしいということがわかって、もっと適確な診断には、次のような別途の研究方法も必要である。それは臨界観察である。せっぱつまつた時とか、楽しい時など、内面と外面が一致した時の行動や描画を研究するのである。平素の模範生タイプにとじこもっている子どもなど、平常の場面ではいくら観察しても、わかりにくいものがある。

行動観察の場面とその行動の類型として、

(1) 叱られたとき

へつらう、従順、反抗する、泣く、黙殺する、他の権威にたよる。

(2) ほしいものを禁止されたとき

そのまま、盗む、すきを見て目的を果す、抗議する、爆発する、いらいらする。

(3) あやまちを犯したとき

すぐ申し出る、かくす、恐れる、理くつをいう、罪を転嫁する。

(4) 恐怖の場面

青ざめる、萎縮する、落ついている、逃げる、ためらう。

(5) 病気のとき

大げさ、だまっている、平気、逃げる。

(6) 慣れぬ所へ行つたとき

平気、さわぐ、はにかむ、逃避する、泣く、人をよぶ。

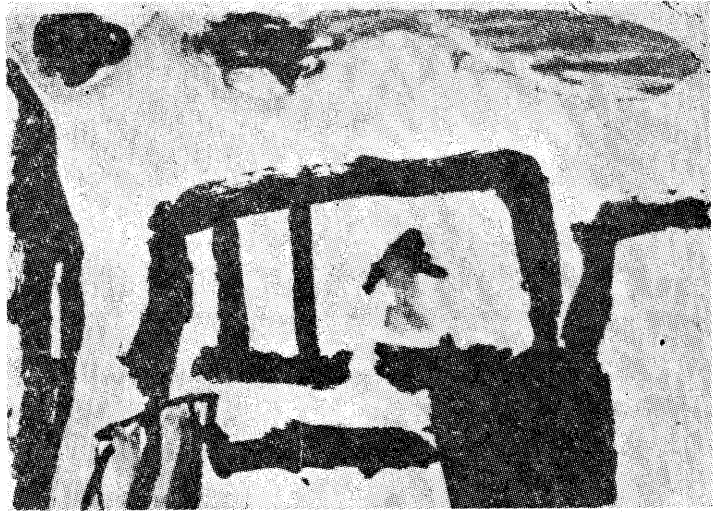
(7) いじめられたとき

へつらう、従順、不服反抗、泣く、逃避する、他の権威にすがる。

(8) 悪事をすすめられたとき

はねつける、ためらう、従う、先生にい





う、知らぬ顔をする。
(9)ほめられたとき

有頂天になる、冷静、恐縮する。

以上のほか、好きなものを与えられたと

き、物をほしがる時、交友関係、悲しむとき、作業の場面、遊びの場面、休養の場面、食事の場面、いつつけられたときなど、いろいろな行動場面が考えられる。こうした場面での、一人ひとりの子どもの深い理解ができるものである。

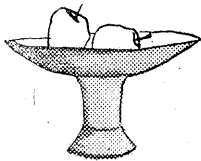
絵の場合でも同じである。上に掲げるのは、つかみあいのけんかを、ブランコのところでやっていったのを教師が左右にわけ、教室へつれてきて、絵をかかないかとききかけた際に、描いた絵である。

タッチの荒々しさ、全体をほとんど黒一色で描いた色彩の点、そして、ブランコのところだけに、人間を象徴する赤を使った色の使い方。

こうした、絵はその子どもの内的な感情を、理解するのに役立つばかりか、他の子どもの絵から、その子どもを理解する際

に、必要な絵の見方を教師に教えてくれるものである。

さて、与えられた紙面が一杯になってしまったが、統制場面での行動や絵の見方の問題が残ってしまった。質問の仕方、質問に対する子どものこたえの判断、一つの場面を設定して、観察する方法、その際の場面の設定の仕方、絵の場合で考えるならば課題の提供の仕方など、残った問題が多いが、いずれ、またの機会にゆずることしよう。



教師が自分自身を理解するには

早稲田大学

相 場 均

この問題の一番基本的な問いは、いったい人間はどれだけ自分自身のことを知ることができようか、ということに始まる。答えから言ってしまうと、それはなみたいていのことではない。

われわれの人格には、防衛機制とよばれる一つの機能があって、われわれの自我が傷つかないように守ってくれている。こうしたメカニズムが時にはわれわれの人格の中心にあるものとは全くちがった自分を作りあげてしまうこともあって、そうした場合にはいよいよ複雑になってくる。

傲慢ごうまんでよそよそしいようなタイプの人が

冷血で無神経とは限らない。しばしばそうした傲慢ごうまんさとか、よそよそしさは、気の弱い、ちょっとしたことでも心が傷ついてしまうような人の保身的な態度で、むしろ傷つきやすい自我を守るための防衛機制かも知れないのである。

たとえば、電車の中で、一人の老人が坐っている自分の前に来てつりかわにぶらさがっているとす。気の弱いてれくさがる人は、その老人には気の毒だと思いがらも、すっと立って、席をゆずってやると言う、その人にとっては、はでな行動はおもはゆくてなかなかできないのである。

こう言ったタイプの先生は、過敏で神経質で、教室でも職員室でも気をまわしすぎて、いつもとりこし苦勞をしてしまう。人は自分のことを、こう思うだろうと、いやそうではないだろう、と考えすぎて、スムーズに行動できないことが多いのである。

このタイプの教師は自分自身のことがよくわかつているのだろうか。

もしこの先生に、あなたの性格について、自己観察をしないと言って、一冊のノートをあたえれば、おそらく、ぎっしりと、こまかく、自分自身を分析したメモを書いて出すことができるだろう。

心理学者にとつては、こうした教師の自己分析は大変役立つし、面白いデータになるかも知れないが、このことは直接には、教師が自分自身のことをよく理解していることにならない場面も多い。つまり、あまりに自分のことを考えすぎて、他人が、とくに子どもが、自分をどう考えているかということから遠くなってしまふからであ

る。

自我意識の過剰の例としてこういうのがわかりやすい。「学生が新しい帽子を買ってかぶり始める。そうすると電車の中でも、バスの中でも、みんなが自分を見て、ああ新入生だなど思ったりする。」この例のように、この学生は新しい帽子のことばかりを考えて、みんなが注視すると考えるけれども、世の中の人々は、それほど他人のことには注意を払わないし、結局、その学生の一人ずもうのようなことで終わってしまうのである。

つまり、こういった教師は自分のことが、よくわかっているようで、かえって現実的にはわかっていないことになる。

今までのべて来たのは、防衛機制の働きによって、比較的気の弱い人が、外に壁を作ると言ったような例である。しかし、この壁はこの程度では、まだ、ひどく厚いとは言えない。

次にはそれをもつと厚くなって、心の奥

まで壁になってしまっているような例をとりあげてみよう。

今までの例では、外の壁は自分自身とはちがっていて、気が弱かったり、神経質すぎるために、つい別の態度が出てしまうと言ったようなことであつたが、外の壁が自分自身なのか、単なる壁なのかわからなくなってしまうことさえ起るのである。

専門的な表現をすると、われわれの心を防衛機制によって合理化してしまうような場合である。

たとえば、ある子どもが憎らしくて、ひどくしかつてしまったとする。もちろん何かきっかけがあつてその子どもは悪いことをしていたかも知れない。その子どもが憎らしかつたと言うその先生の基本的な感情と、子どもが悪いことをしてそれをしかつてしつつけると言う教育目的が一緒に存在する場合、前者の感情を意識の下に沈めてしまつて「この子をよくするために！」と言ふ気持が前景にきて、すべてを合理化して

考える傾向の人も実際にはかなりたくさんいるのである。

「教育のために！」「子どものために！」と言ふことだけを考へて、天職だけがその前景にきてしまうと、しばしばいわゆる先生タイプになってしまうのである。

先生も人間である以上、いろいろな感情がある。ある時は、よろこび、ある時はおこり、そうして悲しむのであるが、すべてを教育者と言う立場からだけ考へると、だんだん意識がせまくなつて、すべてを教育と言う名のもとに合理化してしまう結果になつてしまうのである。

ベルリン大学の教授ですぐれた教育者でもあつたオスワルド・クロウ教授は、教育者の自己教育を重視してそのことをくりかえし書いているが、それには、教育者の豊かな人間性が必要であることを説いている。子どもは、直観的に教師の感情をくみとる能力を持っているので、教師の高い情操じょうそうはことさら、大切なことなのである。したが

って、この第二のタイプの教師になつてし

まうことはかえつて教育の本質から遠くなつてしまふのであるが、こうした教師は、

不幸にして、一番自分自身のことかわからないのである。何か苦情が出れば、自分の

教育目的を理解してもらえなかったのだと悲しむだろうし、感謝されれば、教師とし

ての喜びにひたるのであるが、そこには、しばしば「教師」という形骸しか残らな

い。今、かりに二つのタイプだけをあげたのであるが、性格学の立場からはもっと多く

類型化することができる。ここでは例をあげたのに過ぎない。

次には、教育学の立場で考えられている教師のタイプをあげてみよう。

ミュラーライエンフェルス氏は、次の四つの類型をあげた。

(一) 博識をもっている学者型

(二) その主な意向が外面的形式を正確に遵守することに向けられている官僚

型

(三) 厳格な規律や挙動を維持することをその喜びとする将校・下士官型

(四) 生徒の内面生活に愛情をもつて入りこんで行く牧師型

性格学の複雑な考え方とはちがって、この方はわかりやすい。

しかし、どの類型に自分はいるにせよ、教師が自分自身をよくみつめるためには、

ゆとりを持って、むしろ教師の類型からはなれて、人間として、自らを見出すことが一番大切なことではないかと思う。

教育心理学の方では測定技術が発達してきて、子どもが先生をどう思っているかを統計的に調査している。

また臨床心理学や精神分析学の方では、教師の個々の内面的な性格に深くメスをいれて、自らの性格を知るのに役立ち、また

性格をゆがみのない方に導いて行くこともできる。

しかし、先生方が、それによって直ちに

自らを知り、よりよい教師になれるかと言うと、なかなかそうも行かないのである。

ミュラーライエンフェルス氏があげている類型にしても、それぞれ長所と短所になる場合もあって、どれが一番よいとは、

決定的には言えないし、各々の教師は、すこしずつそのどの要素をも持っているの

ある。

やはり結論としてはクロー教授が言うように、自分自身の人格を高めることで、こ

れが自然に自分への理解になるのではないだろうか。

川村短期大学

帆足喜与子

他人を理解することは精神発達の順序か

らいつて、自分自身を理解することに先だつと一応考えられる。しかし、理解という

語をよくよく考えはじめると、自分自身がわからないで他人を理解することができるだろうか？と気がついてくる。児童期までは、人間は自分より外側の世界をよく理解するが、成人にとつて、自分の理解と他人の理解とを切りはなすことはできない。常に両者はささえあう関係に立っている。

教師が自分自身を理解することは子どもを理解することにつながっている。教師にとつて、自分の理解が深まったということとは子どもの理解が深まったということとはかならない。

常々私は、教師は自分の行動を説明しえなければいけないとおもっている。文学者は描写し、感じを述べることに自分が自分であることを知るで、教師は相手の子どもの発達を助長するために適当な行動をした、という自覚を持つことにおいて自分を知ることとおもう。なぜ自分は他のやり方をしていないでこのようやり方をしたのか、あるいは、しようとするのか——それを知ること

によって教師としての興味も出てくるとおもう。

教師の適当な行動が期待されるもととなる条件は、教育の場においては、相手の子どもの発達程度、相手のパーソナリティ、相手のおかれている事態、それに至るまでの成り行き、それと、これに関与する教師のパーソナリティとその心理学的、教育学的知識とである。こういう条件の上に教師の一定の行動が生れて来るのである。だから私たちは相手の一人一人の子どもの心身の発達程度をつぶさに観察して、子どもを知る必要がある。児童心理学と発達心理学は観察の助けとなりよりどころとなる。また相手の個性を見る必要がある。個人によつて、身のまわりのことはよくできるが、リズムの感覚はよくないとか、人の話をよくきくが、それだけに神経質すぎるというふうなことや、それだけの感じ方のくせ、ことばのくせ等、あらゆる面にわたつて個性的特徴をひろい上げてみることである。

また相手が現実におかれている事態の構造をはあくしなればならない。こうした条件のそろつた上に教師自身のパーソナリティに限定され、彼の教育的知識に導かれて、教師は行動するわけである。

ところが私たちは完全では決してない。適当だとももつてなした行動が効果をあげないことが多くある。子どもの関心をひき出そうとおもつたのに結果が逆になつてしまつたり、なだめるつもりが攻撃をひきおこして取捨がつかなくなつたりして、自ら驚き自信を喪失しもある。この時、自分の何がいけなかつたのかを反省することによつて教師はめざめるのである。相手の発達程度の認識や個性の観察についてかえりみ、再び知識の整理をし、この次、子どもに向つたときには、自分の認識・態度を改めようとする。この過程において教師は自分自身を以前より一步進んで理解したことになる。これが先だつことによつて相手に対する理解も進むのだといえよう。

このように自ら気づいて失敗を見出すことは比較的容易であるが、他からつつかれる等刺激が横合から来た時に行動をふりかえったり、正しく転回したりすることはなかなか簡単ではない。例えば、父兄からもっと何々をしてほしいとか、保育をこうしたらいかがですか、などといつて来る。

思いがけない質問をかけられたりする。また、教師同士で、考え方、やり方がちがうために相談がまとまらず共同の仕事がうまくゆかないこともある。こういう横合いからのチェックも、至る時、至る所における。この時また一つの重大な分れ目——自分自身を一段と理解するようになるか、それともとのレベルでとどまるかの分れ目に立つのである。この危機の処置は非常にあやまられやすいので、もし合理的に処理するならば、教師は現在の実情より、もっともっとと実力を持ち、知識も豊富になっていくとおもうのである。チェックにあったとき、あの父兄はよく知りもしないのにやか

ましくさしでがましい、と思ったり、他の教師との間のことでは自分が先輩なのだ、と先輩であるというだけのことにより現実を目をむけることを回避したり、職責上の地位をかさに着たり、幼稚園として団結するというそのことだけで外からの刺激に防衛体制をつくったりする。一応いかにも幼稚園内部で助け合っているようである。面子に支えられることによって自信を失わずにすんだようにおもう。だがこれはあまりにも盲目で内容に乏しい。この時に折角の自分を理解するよい機会が失われてしまう。

よい機会というわけはこうである。人間は一体どんなに自覚的であろうとしても、いつもいつも自分の行為の理由を考えているわけにはいかない。目前にとつきにおこる事柄に対してとつきに反応していることが大部分である。少し他からつつつかれなければ、自分の行動は考えなおされることなく、意にとめられないまま流れ去っていくであろう。

他からの刺激でチェックされたときに、防衛体制にかくれずに、自分の行動を説明するようになりたいものだとおもう。私たちは他からつつつかれるとまず防衛することが先になり勝ちだが、自分の行動を説明してみると相当に合理的に説明しうる。思った以上に適当な行動をしていたことに気がつくものである。よく説明できれば知識が自分のものとなり、自信が強められ、つぎの行動が一段と合理的に進歩するのである。時には素人の意見はすばらしく暗示に富んでいることがある。よかれあしかれ他からの意見を尊重したい。

さてもう一つ別の面から自分を理解する手段を附加しておこう。教師としての行動を限定するものに自身のパーソナリティがあつて、これは行動をかたよらせる要因になる。それゆえ自分のパーソナリティを知ることが大切なこととなる。内向性であるか、外向性であるかとか、分裂質の度、循環質の度、男性度、女性度などがどんな割

合に存するかなどを検査によって知っておくことは有意義である。あまり極端な特徴は矯正するようにつとめるよすがとなるし、自己の行動を必然と肯定するに役立つこともある。

また、現在フィルムは相当普及しているが、これが自由に使用できるようになり、教育の場における姿を映してみることができようになつたら、自分の理解は大いに広げられるだろう。特に幼稚園や小学校低学年の教師は皆これをやりたい。相手とむきあっているときの姿勢が適当であるか、どんな表情をのぞかせるかなどについて、自分だけでは自分のことをあまりに知らなすぎる。すべての教師がフィルムによって自分の姿を眺め、テープレコーダーも盛んに使用し、正しい仕方によって自分らを分析研究したら、教育の場はその後相当に変化すると思像される。

教師が自分自身を理解するについて、自分の行動を理由づけることの大切であるこ

とと、客観的に自分を知る方法の二、三を述べた。前のことと、後のこととはいささか次元を異にするものではあるが、二つとも最も重要な事柄なので、ならべて挙げてみたのである。

二子幼稚園

河尻朋子

教師の生活も、馴れきつてしまうと、知らず知らずのうちに型にはまったものになり、型から自分をはずして眺めることが困難になってきます。自分のしていることは、ほんとうに子どものためになっているでしょうか。子どもの自発性を妨げないようにと、そればかり頭にあつて、いつの間にか子どもにひきずられていたり、あれこれと「きまり」を守らせることにとらわれて、知らぬ間に、のぼしてやらなければな

らない芽をふみにじつていたりすることはないでしょうか。私は、過去二年をふり返つてみて、ある時は目標にとらわれ、自分ばかり先を急いで子どもたちとの隔りにも気づかなかつたことを思い、ある時は子どもたちに先を越され、追いつこうとして息を切らしたことを思い、子どもたちと共に歩くことのむずかしさを、今さらのように感じています。子どもと共に歩こうとすれば、教師は、子どもの心の動きをしっかりとらえていなければならぬと同時に、自分自身が目標に向かって何をなすべきかを理解しておかけなければなりません。教師は、子どもといっしょに遊んだり仕事をしたり、どんなに子どもの近くにいっても子どもの心の動きには敏感であり、冷静な判断をくだすことができます。しかし、自分自身に目を向けた時、自分の心はとらえがたく、どうすればよいかと思ひ迷うことも出てくるでしょう。ある子どもについても知りたいと思えば、その子どもについての

観察記録、各種のテストの結果、家庭調査など、多くの客観的な資料を集めることができますし、必要とあれば、親との話し合い、児童相談に当たっている人々の意見をきくなど、いろいろな方法が考えられます。

また、現場の教師でも、馴れてくれば、表情や行動をちょっと観察しただけで、ある程度その子どもを理解することができま
す。ところが、教師が自分を理解しよう、客観的にとらえようとしても、子どもの場合のような資料を自分で集めるわけにはいきませんし、また、つねにだれかに観察批判してもらうわけにもいきません。どうすれば自分を客観的にとらえ、自分自身を理解することができるでしょう。私は、それを二つの場合に分けて考えてみたいと思います。一つは現場について自分自身を理解すること、他の一つは現場から離れていて自分を理解することです。

① 現場で自分自身を理解すること

現場で子どもといっしょに動いている時

には、子どもに目を奪われて、目標がこういうことで、そのためにこうしているのだ、こうすべきだというようなことを絶えず考えている心のゆとりは、なかなか出ないものです。この場合にはこうしたなればならない、こうすべきだと信じて、ともかく子どもをその通りにさせようとしま
す。子どもがその通りにならないとき、むりな要求をしているわけではないのにと、勝手な行動に出る子どもたちをうらめしく思ったりします。方法が悪かったのか、そうさせようとしたこと自体が間違っていたのか、それとも両方なのでしょう。子どもたちにとって紙芝居やスライドほどには面白くない「生活発表」など、一人の子どもが二言三言しかしゃべらなくても、ぐずぐずしている子どものために手間どって、ひとまわりするのに三十分近くもかかってしまつと、終りごろには子どもが飽きて全体がざわついて来ます。教師は「人の話を静かに聞く」という生活目標であるなら

ば、子どもたちに忍耐を教えこもうとするでしょう。しかし、相変らず子どもが落ちつかないとすれば、その原因を考えるでしょう。やり方が悪かったのか——たとえば、机の並べ方に配慮が足りなくて生活発表を楽しめるような雰囲気が出てこなかったとか、教師の話の運び方がまずかったというようなことはなかったでしょうか。それとも三十分近くも静かにさせておこうとすること自体がむりではなかったか——たとえば、子どもたちを集める時間が早すぎ、遊び足りなくて不満のために、あるいは逆に遅すぎて遊び疲れているために、三十分もの緊張の持続は望めないものか——もしそうだとすれば、発表は子どもの半数にとどめて残りは次の週にするという約束で、話の時間を短くするというようなことを考えるべきでしょう。教師にこのような反省を促してくれるものは何であるかといえば、それは子どもたちの表情であり行動なので。子どもたちは、相手が先生だから

らといって、自分の感情をおもてに出すまいと心の中に押しつつむようなことはしません。自分の友だちに対すると同じように先生に対しても、喜び、悲しみ、怒り、不満などを卒直に表わすでしょう。教師は、ある子どもが他の子どもに対して怒りや悲しみをことばや行動で訴えている時、その子どもの心を理解しようと努め、両方の子どもにどんな取り扱いをしてやったらよいか冷静に見きわめることができます。それと同じように、教師は、子どもの自分に対するいろいろな形の訴えを通して、子どもに対する扱い方が誤っていないかどうかをすばやく読みとることによって、ある程度自分を客観的にとらえることができるのではないでしょう。私には、子どもを理解することが、自分自身を理解しようとすることに深いつながりを持っているように思われるのです。

② 現場を離れていて自分自身を理解する

こと

子どもから離れて自分自身を理解しようとする場合には、教育の内容あるいは技術についての研究、教育者についての研究など、今までになされている多くの研究の結果が何よりも役立つと思います。これらは、一人の教師について、一人の子どもについての観察記録、テストの結果などのような客観性は持たないかも知れませんが、教師が自分の技術、内容をよりよいものにしていく上に、貴重な資料となるでしょう。現場では、絶えず子どもと共に動きながら子供の表情や行動を通して自分をとらえようとするのですから、そのとらえ方もその場その場の一時的なものになってしまいがち、自分の向かっている先を見通し、現在から未来へまたがっている長い時間の中で自分をとらえることは不可能に近いのです。ところが教育の技術・内容についての研究の結果は、教師が自分の出方に対する子どもの動きを予知し、時と場合に応じて最もよい教育内容・技術を選ぶ洞察力を教

師に与えてくれることによって、教師に現在から未来へつながる時間の中で自分をとらえさせてくれます。①にあげた「生活発表」の例を考えてみると、ながい時間子どもを静かにさせておくこと自体がむりなのか、それとも、ただやり方が悪かっただけなのかというようなことは、子どもの表情・行動を通して反省するのではなく、ことにおつかる前に、時と場合によって起り得るあらゆる子どもの状態を思い浮かべ、それらに対するあらゆる方法をあらかじめ考えておくべきなのでしょう。一の、子どもを理解することから教師が自分自身を理解しようとするのを消極的な理解の仕方とすれば、二の、教師が自分をとらえ、自分自身を理解してから子どもたちも理解しようとするのは積極的な理解の仕方といえるでしょう。

また、子どもから離れて一人でいると、子どもたちといっしょに動いている時には気づかなかつた、小さな、しかしおろそか

にはできない事柄に思い当ることがあります。教育の技術・内容については気を配っていても、子どもに接するときのちょっとしたことが多いのです。教育者の態度の子どもに及ぼす影響、好ましい教師はどんな性格的要素をもっているかというような研究は、自分の性格に対する反省を促してくれます。教師が神経質であれば子どもも神経質になるでしょうし、教師がいつも必要以上に大きな声で話していると、子どもたちも大きな声でしゃべることを何とも思わなくなってしまうでしょう。教師は、子どもたちへの影響を考えて、自分の性格についても常に細かい注意を忘れてはならないと思います。

以上、教育の領域のなかで、教師が自身自身を理解するにはどうすればよいかを考えてきたわけですが、教師も社会の一員である以上、教育の領域を越えたもっと大きな複雑な一般社会の中で、自分自身を理解

することも考えなければなりません。教師は教育の面で専門家でありさえすればいいのではなく、円満な人格と広い視野をもった立派な社会人であるべきだと思います。それには、教育以外の仕事にたず

実際保育の場で 子どもを理解するには

市川 学園

宇田川 照子

桜のつばみがふくらみ、愛らしい小鳥の

唄声が聞える頃になって、新しい子どもたちを幼稚園に迎えると、早く一人一人を理解して、その子その子に適切な指導をした

い、と誰でも思うことでしょう。

子どもを理解する方法は種々ありますが、実際保育に当たっている私は、次のようなことを手がかりにして、子どもを理解す

さわっている人々とも意見を交換し、あらゆる角度から教師としての自分を眺め、社会人として不具にならないよう努めていかなければならないと思います。

るようにつとめています。

○入園前に行う面接

私の園では、毎年一月の下旬頃、新しく入園する子どもと母親に面接します。それは、子どもを選衡するためでなく、子どもと親しみ、子どもを理解するためです。保育室に母と子と一緒にいらり、一つ机に子どもと教師と向かい合い、他の机に母親と

園長が向かい合います。そして子どもに、自分の名前、物の名、色、数等、絵本や玩具を使って簡単に質問します。このようなことは今まで家庭にいた子どもたちにとつて、ほとんどが初めての経験です。けれどもこのような同じ場面に出会っても、子どもたちは、それぞれ違った行動をします。部屋にさえはいらず泣き出す子もいれば、反対に非常に愛敬よく社交的に振舞う子もいます。

顔色の悪い神経質そうな子、質問に、はきはき答える子、質問の意味が理解できず玩具で遊び始める子、一方、丁寧におじぎをさせる母親、子どもが早く答えるようせきたてる母親……

こうした面接で子どもの健康状態、身体発育の様子、社会性や知能の発達程度、意志の発表力、母親の子どもに対する態度などの概略がわかります。このようなことを一応記録しておき、あとで参考にします。

| 氏名 | 面接時の印象 | 調査表によつて | |
|------|-------------------------------------------------|---------|--------------------------------------------------|
| | | 兄弟数 | 順位 特殊な事情 |
| 〇〇〇〇 | 一見おとなしそう。身体大きく肥っている。色、数はよくわかり、はつきり答えるが、幼児語がひどい。 | 0 | (独) 1 両親、祖父母等、大人の中で育った一人子。 |
| 〇〇〇〇 | 名前もいわず横を向いてしまふ。質問の意味がわからない様子。少々幼い感じ。母親年取っている。 | 2 | (末) 2 一日一五〇円もお小づかいをつかう。商家で忙しい。左利きである。姉と九つちがう。 |
| 〇〇〇〇 | 身体細く、元気がない。色、数は分るが答え方がはつきりしない。 | 3 | (中) 2 小児麻痺の兄、就学免除。しつっこい性質。 |

○幼児家庭生活調査表

いよいよ入園式になると、幼児家庭生活調査表を配り、一週間位の間に、詳しく書き入れて提出して貰います。その内容は、家族構成・住居・発育状況(出産・哺乳・言語・食事)健康状態(既応歴・かかりやすい病気・睡眠・排泄)家庭での生活(世話する人・好きな遊びや玩具・お小づかい・性質)入園前の教育・家庭での教育方針などです。用紙が提出されたら、一人一人よく目を通して、特に目立った記録があったらしるしをつけておきます。たとえば、両親・祖父母・叔父・叔母・同居人・使用人など沢山のおとなの中で育った一人子とか、小児麻痺で就学免除になっている兄をもつ子、異常出産、早産、出生時体重五〇〇匁位の子、一日一五〇円もお小づかいを使う子、既応歴の多い子、就寝のおそい子、左利きの子等です。特殊な事情はその子を理解する手がかりになるからです。

次に面接の時の印象と調査表の特殊事情

を、一人一人次のようにまとめてみます。また、兄弟数と出生順位は、参考になるので、全部記録しておきます。

○子どもの行動の記録

毎日子どもたちと一緒に生活していると、種々な機会に子どもを理解する手がかりになるような行動に気づくことがあります。それらを日誌に記録しておきます。たとえば、

○月○日

Tは様子を見に来た母親を見つけ、帰ると泣く。お菓子をくれないといってぐずったとのこと。なだめて連れて来ますと母親が連れて出る。もどってきたらポケットに、アメ、衛生ボールをたくさんいれてきた。

○月○日

Fは朝から、どっかり腰をおろし、他の子が元気に外遊びするのに本ばかりみている。誘っても外へ出たがらない。疲労して

いるのだろうか。顔色は悪くなく肥っているが、堅肥りでない。幼児語がひどい。

これらは入園間際の記録ですが、保育中に気づいたことなど、簡単に記録しておきます。

○母親との話し合い

こうして記録しておいて、あとで母親と会った時に、幼稚園の様子を率直に話すようにします。そして、母親から、家庭での

様子をうかがいます。前にお菓子をもらった子どものことを記しましたが、母親が次のように話してくれました。「何しろ朝ごはんを食べないんです。隣りがお菓子屋で一日お菓子ばかり食べてるんです。それが一日一五〇円じゃきかないんですよ。家は商売しているので、お客のいる時お金お金といわれると、ついうるさくなってやっってしまうんですよ。三度に一度はしおきするんですがね。何しろ、年取ってできた子でおとうちゃんが甘くて……」

朝食もとらず一日一五〇円もお小づかい

をつかわせる一方、三度に一度はしおきするとうような育て方……

また、やせた色の白い子で私のところへ細かいことまで、きぎに来る子どもがいまいた。調査表をみると非常に好ききらいが多くほとんどのものを嫌いで困る、と書いてありました。その子の母親は次のように話してくれました。

「この子が赤ちゃんの時、母乳が足りなくて医者に牛乳で補うようにいわれたのですが、おばあちゃんが、母乳以外のものをのませて、もしお腹でも悪くすると大変だ。

医者には牛乳を足していますとっておけばいい……と聞いてどうしても医者のようにさせないんです。それで、この子は発育が悪く病気がかりしているんです。下に弟ができてからはおばあちゃんもわかってくれて混合栄養にしたので、弟の方が発育がよく身体も大きいんです。今では、わたしが我が張って可哀相なことをした、とおばあちゃんは、くやんでいるのですが……

：

母親の話をきいていると、その家庭のふん囲気や対人関係、子どもの育て方などがわかり、子どもを理解するのに非常に役立ちます。こうした話し合いは、母親が送り迎えにみえた時、母の会終了後の懇談会、家庭訪問した時などに行います。

○子どもの表現

・言葉による表現

自由遊びの時、おべんとうを一緒にいただく時など、子どもたちの方から、家のこと、父母のこと、兄弟のこと、外出したことなど、話してくれることがあります。また私の方から、きのうの日曜日何した？

どんな遊びが好き？ どんな食物が好き？

とか、三つのねがい等という紙芝居をしたあとに、もしみんなが何でも三つおねがいができるとしたら、何っておねがいます？と尋ねたりします。子どもの言語表現から、友人間の交渉や、子どもの欲求などがわかることがあります。

・絵による表現

子どもの絵は、子どもの心を知る鏡であるといわれますが、絵も子どもを理解する手がかりになることがあります。絵を描きたがらなかつたり、隠したりする子は、下手だといわれた経験があるのかもしれないし、大きさも小さく、色も貧弱で、固まった絵しか描けない子の生活は、楽しい充実したものではないのかもしれない。非常に緻密な絵を描く子は、知能が高いのだろうか、特殊能力があるのだろうか……等と、子どもの絵を見て、その子のことを考えさせられる場合があります。そのような時、子どもの絵は子どもを理解する手がかりになります。

○遊びの観察

子どもたちが、自分たちでグループを作って自発的にままごとや鬼ごっこ等の遊びを展開できるようにすると、私は時々、その遊び工合を観察することがあります。いつもリーダーになっている子、リーダーに

なれないと、遊びをこわす子、またいつも追隨者になって、楽しく遊ぶ子、遊びの規則を破って仲間はずれにされる子、自分が不利な立場になると、遊びからぬけてしまいう子……

遊びを観察していると、集団内での子どもの地位、その地位に対する満足、不満、友人間の交渉等、子どもの集団内での行動の仕方がわかり、子どもを理解するのに役立ちます。

○その他ある子どもの知的発達をとくに知りたい場合には矢張り知能検査をします。また、級全体の子どもに簡単な知能検査のような課題を与えて、子どもたちの知的発達の程度を知ることがあります。

非常に不十分ですが、私は実際保育に当りながら、前に託したようなことが手かかりにして、子どもを理解するようにつとめています。

二子幼稚園

谷口喜久子

私のような経験の乏しい者が「現場で子どもを理解するには」という荷の重い題目をいただいてしまい、全く何が書けるか疑問です。今この題目をながめ、短い二年の経験を通して、私が受け持った二年保育四十名ばかりの子どもの、どの程度理解して保育に当たったか、考えてみると、恥ずかしいことですが、正直なところ、子どもを良く理解して保育に当たったとはいえません。理解しようと努力はしたつもりですが、不十分のままずるずると過ごしたような気がします。いつも子どもといっしょにいた。そしていっしょに遊び飛び、仲良しだった。何だかそれだけだったような気さえします。未熟さと精神的にもあまりいっしょになりすぎていたために、一歩さがって子どもをながめる余裕がなかったのかもかもしれません。また、そうしていても無意識の内に過ごしてしまったのかもかもしれません。何だか夢中で過ぎてしまった二年間でした。

それゆえ、今改めて過去を振り返りつつこの題目について考えてみようと思います。

保育をするに当り、子どもを良く理解する、良く知るということは何よりも大切なことのひとつではないでしょうか。同じひとつのことをするにしても、子ども個々によつてそれぞれ異なる仕方、状態を示します。機敏な子、のそのそしている子、幼稚な方法である子、程度の高いやり方をする子などいろいろです。これは性格や行動についてもいえることです。楽しそうに遊ぶ子、積極的に、また消極的に遊んでいる子、その遊んでいる子をながめている子、他の子の遊びを邪魔したり泣かせている子ども、これらの子を、より適切に指導し、良い点はさらにのびし、伸び伸びと楽しく社会集団生活の基礎を身につけさせなければなりません。それには子どもを良く知り、いたずらな迂回をすることなく成長するよう指導することが大切だと思います。

入園式の日、初めて子どもを前にして一人ひとり顔をながめていると、みんなそれぞれ不安に満ちた顔をしてこっちを見えます。それぞれ違った環境から集った子どもたち、これからどんな行動、性格、集団

への適応を示すか、私も興味・期待・不安など複雑な気持ちで眺めていると、泣き虫、甘えん坊、きかん坊らしい顔をした子、しっかりしているらしい子など、みんな今日はおとなしく、そして行儀が良く、借りて来た猫のよう。この子たちになるかしらと思われ地を出したらどんなになるかと思わず考えずにはいられません。この子どもたちと毎日幼稚園で生活している、早く自分の本当の姿・性格を出せる子がいるかと思うと、なかなか殻を破っていてどんな子なのかわからない子もいます。おとなしい内気な子かと思っていると、なかなか積極的な活発な子であったり、初めすごく目立った子が段々影が薄くなったりそれは様々です。しかし私たちは早く本当のその子の姿を知る必要があります。知らないままに指導した場合、それが(+)になっている場合もあります(一)の力となっている場合もあります。そして、また、自分中心だった家庭の生活から幼稚園という、子どもが且つて経験しなかった、ある種の規律のある大グループの中で生活して行くのですから、円滑にその中に入って行ける子もあれば、種々の抵抗を示す子もいます。このことは子どもの育った家庭での生活状態や、

環境条件に大きく左右されるものですが、私たちは適切な指導により、子どもに餘計な心理的負担をかけることなく、集団生活にうまく適応できるよう導いていかなければなりません。そのためにも子どもを良く知ることが重要になります。

そこで子どもたちを、保育に携わりながら実際に理解する方法はいろいろあると思いますが、まず最も手軽に実際にできることは、子どもを良く観察する、すなわち良く見ることだと思います。観察の対象は常に自分のまわりにおいて、しかも場所時間を問わない（もちろん子どものいる間のことです）。しかし実際には多くの子どもの世話を追いまわされ、あまりに多くのいろいろなことが目の前を通過するので、第三者が観察するような工合にはいきませんが、長い時をかけ、少しずつ子どもの観察を積み重ねていくことによって理解していきことはできると思います。事実、観察対象が一人であればどんなに容易であろうと思うことがたびたびあります。入れ代り立ち代り接触して来る多くの子ども、目と手と頭がもっとあつたら十分にしてあげられるのに、いつもくやんでしまいます。それゆえ早急にあの子はこうだというようなことは

云えませんが、長い時間をかけてゆつくり見極めたその子のイメージは、短時間では見られないような、ごくかくれた点をも加えることができたりします。しかし対象はオーミステークとはいふことのできない、生きた子どもですから、私たちはできるだけ早く知る必要があります。そのためには子どもが早くその生地を出せるような環境を作つてあげねばなりません。楽しい幼稚園、子どもが本当にそう思えるような雰囲気を作つてあげるのが私たちの仕事のひとつです。そして子どもの生活上、大きな割合を占める遊びを、自由な雰囲気の中で、伸び伸びとさせて、その中に現れる子どもの姿を良く理解し、その中で、集団生活に必要な基本的な事柄や習慣・健康に関する習慣その他の扱い方や種々の幼稚園生活上の約束を体得するよう指導しなければならぬと思います。そこで私は一学期の間は、比較的仕事なども（遊び以外のこと）自由にし、集団の中で上手に遊べるようになることに力を入れてみました。もちろん私もいっしょになって遊びました。誘われなければいけないR子。この子はいりたそうにしていつも見ていました。自分からははいって来られない子でした。

そして私の気を引こうとするような態度をよく見せました。あまり家で手をかけられ過ぎ自分中心に生活が営まれていた家庭の子でした。そうかと思うと女の子よりもむしろ男の子と活発に遊ぶE子。この子は男の子の人気者。すぐ癩癩を起し、椅子などを振りまわし、真赤になってあばれるM。この子は段々我慢することを覚ええました。この性格はおとうさんそつくりでした。乱暴なことの好きなYとH。しょつ中喧嘩をしていました。Yは体も大きく力も強い、力があり余っている結果が喧嘩になってしまいました。でもこの子は、小さい子には優しく正義感も強く、さっぱりした性格でした。Hの方は身軽で、破壊性が強く、一でされたことを五で返すような執念深い面を持っていました。でも反面、とても親切で人が困っていると、いろいろな物を貸してあげたり、手伝いや片づけなどを大変良くする子でした。私はこの子の乱暴で執念深い面を何とか良くしようとして、良い点をも一時(一)にしてしまったことがあります。このことは、今でも、私の心に深く、食い入っています。

また、観察の場面は、たんに遊びの場面のみではありません。製作、話し合い、絵

を書いている時も、その他幼稚園にいる間はいつもです。遊びの時、元気がった子が製作となると意気地がなくなり、なにもしなかつたり、そうかと思うと急に元気になり、生き生きとして来る子、落ち着きが無く、注意散漫で、途中で投げ出してしまいう子、なんでも丁寧いきちんと仕上げる子など、種々様々です。絵を書く時、自分からは書かないで、常に上手だと思ふ友だちの絵を真似て書くH。その子がおかあさんの参観の時、絵を書きました。いちいちおかあさんにお伺いを立てて書いています。あまりおかあさんが子どものできばえに口うるさくいう結果でした。

しかし子どもの性格はたつたひとつの場面のみで全部が現われるわけのものではありません。場合により時により状態により、現われ方が違います。それゆえ、その時々により理解をしなければなりません。たとえば、製作でも、興味の乗った時は、傍で何をしていても平気で自分の仕事をしているのに、それが遊びたりなかつたり、外に向った興味を中断してさせたような場合は、全々駄目です。それゆえ、その時その時を適切に判断し、導く必要を私たちは負わされていますが、これがなかなかむず

かしく、私のような未熟な者には、反省の結果、しまったと思うばかりです。しかし本当に良くいった時は、最上の喜びでもあります。

子どもを理解する場合、たんに子どもの観察だけでは不明な点がたくさんあります。また理解し得ない部分も場合もあります。そのような場合、おかあさんと話し合いや、知能テスト、家庭調査表などの記録を参考することによって理解できる場合があります。また子どもと話しをするということは、大変子どもを理解するのに役立つものだと思います。家での母親の教育熱心が、誤った方向に向いていたため、幼稚園が休息の場となっていた子。義理の祖母の仕打ちがひどいため、被害妄想症のようになり、ちょっと友だちが触つても、私をいじめようとしたとか、いじめたとかいに来たどこか暗いところのあったM子。知能テストの結果、知能発達の遅れていたための行動であったなど、観察で得た結果の裏付けとなつたり、理解を深めるために重要な役割をはたしてくれました。けれども、実際に保育をしながら子どもを理解することは重要なことですが大変なりともあります。相手が多い上に、その

行動・性格がいろいろの形になって現われて来るため、また、子どもの大まかなイメージを捕えるとともに、その時その時の子どもの感情をも理解する必要があるため、短時間では子どもを理解できるものではありませんし、また、生半可な理解でその子にある型に入れてしまふことも危険だと思えます。保育者は、子どもを理解しながら指導をし、指導の結果によりさらに子どもを理解して行く、そして子どもに社会集団での適応性を与えていかなければならないのです。その上、子どもは次第に成長していきます。以前成功したことが次の時にも同じ結果を生むとは限りません。子どもはもつと先の方へいつてしまつていることもあります。ですから私たちの子どもに対する理解も進まなければなりません。ゆえに子どもの観察は常に行なわれなければならぬし、常に理解を深めていかななくてはならないのです。そして、より良い指導を子どもに与えていかなければならないのではないのでしょうか。

とりとめのない、題目からはずれたような雑感になってしまいましたが、思いつくままに書かせていただきました。

（4月号） 保育雑誌より

保育の手帖

年間保育計画が臨時増刊として発行され、四月号には、年間保育計画の四月細案と解説が大半を占めていて、ここに主力を

おかれていることがわかる。前年度に毎月の保育案が連載されていたが、新年度のはじめに当って年間保育計画を増刊号にしてくわしく挙げられたのは、実際によい参考となる。これだけのものをまとめるに当っては、本誌の保育案研究委員の並み並みならぬ努力があつてのことと思う。

保育案それ自体もよく考えてみるべきであり、戦後十年余りを経過し一応試行錯誤の段階もすぎ、再び根本問題として検討する時期がきているのではないだろうか。

この保育案は、幼児の発達を常に考慮し

て組まれたもので、内容も「集団生活の発達」「上の発達に応じた教育の狙いと指導の要領」「計画の具体化と六領域に分けた指導の重点」にわかれている。それも発達心理学的根拠の上に立ち、さらに具体的に子どもの動きに即してかかれており、とかく保育案というと、学校での單元を扱うようになりがちなのに対して、よき警告ともなろう。

三木安正氏は、幼児教育のねらいを、集団生活の指導を通じて、その自己中心性を社会化の方向にもっていき、社会人として自律性のあるパーソナリティの芽生えを養うというところにおこうとする、と述べられ、また、幼稚園教育の目標としては、学校教育法第七十八条の五目標を具体化していくために、どのような教育の場をつくる必要があるかということを考えることが、幼児教育の中心的課題であると考へ、五目標がどのようなグループの中のどのような子どもでは、どのように進められていくか

というプロセスを見守り、そこに指導の筋をつかむことが幼児教育研究の急務であり、この線にそって、この保育案も計画されているということを述べている。

四月号には、四月の細案と各経験領域にわたってそれぞれ保育案研究委員がくわしくかいておられる。

三木安正氏の「上手な保育者」は一読を要するであろう。

保育の友

新学期がはじまった。四月という月は、私どもの過去の足どりの反省のエポックでもあるし、希望にみちた将来の設計の時期でもある。しかし、おうおうにして、私どもは追憶と夢を追うのに忙しく、現実をきびしく見つめることを忘れがちである。保育の友「四月号は特集として、保育の現実と問題点をざぐり、その解決を読者に訴えている。

まず、読者からたくさん通信や訴えを

もとにして、宮下俊彦氏が「保育の現実と問題」という見出しで、五つの領域にま

めている。1、施設の問題（部屋が狭すぎ
る。保育室がひとつで、三歳児から就学前
までの子どもをいっしょに保育している。

この二年間、紙芝居というものは一部も購
入していない）2、家庭の問題（家庭の貧
困、愛情の飢え、家庭の不和が問題児を作
っている）3、保育従事者の問題（保母

の欠員、突然の退職、管理者の無理解な干
渉）4、保母自身の生活（生活の不安定、
疲労）5、研究活動（雑談的な研究会など
読みかえすたびに保育上の障害が山積して
いて、とりつくしまもない思いにつまされ
る。

それらの諸問題について、数人の識者た
ちがそれぞれ現実を一步ひきあげるための
解決策を提案している。「貧しい現実の中で
の努力と工夫」（宮下俊彦）「家庭の要望室
にこたえるには」（早川元二）「外に向っ

ての働きかけも」（秋田美子）「担当児童

数は制限したい」（副島ハマ）「運営の合

理化をめざそう」（増子とし）以上の諸氏

の論がそれである。しかし、そうした保育
条件の不備だらけな現実にもめげず、地道
にすばらしい実践成果をあげている熱心な
保育者の姿がある。父母の勤労を助ける気
持で、何から何まで保母たちの手でやって

きた。（栗林茂子）一五〇人全員に歯みが
きを楽しく実践に移した。（加藤智恵子）思
ったことを十分に話せない子を話せるよう

にした。（安達光子）などの実践記録がそれ
である。保育計画とその解説の記事は毎月
号のことながら参考になる。特に、三歳児
保育の具体例はすぐに実践に役に立つ。あ
そびのページ欄は、今月号は小学校の菱沼
太郎氏の劇あそびのひとつのあり方、があ
って新鮮味が出た。「保育と政治」という、

どのように保育関係の子算ができるかとい
う論文は、この雑誌の性格をあらわした記
事として適当であると思われる。

幼児の指導

四月はじめに当面する悩みの一つ「問題

児を集団保育の中でどう導いたらよいか」

が取り上げられている。テンボのそろわな
い子ども、家庭で甘やかされた子ども、集
団場面で場おじが強くひっこみ思案の激し
い子ども、自分を意識することが強くひっ

こみ思案で失敗を気にする子ども、自分を
意識することが強く他人に認められたくて
自分勝手にふるまう子ども、あきっぱい子
ども、乱暴な子ども、自分の要求を通すた
めに泣きわめく子どもなど、問題児を、実
際にどう扱ったかを、経験を通して書いて
おられるので一読をおすすめしたい。

「遊び場のない子ども」東京都大田区の場合について、神崎清氏がのべておられる
が、これは単に大田区の場合だけではない
と思われる。本当に安全で自由な社会的環
境構成—遊び場を中心とした子どものため

の町づくりの仕事が一日も早く実現されるように願って止まない。

相場なお子氏の「世界の子どもたち」は今月はイギリスで、イギリスの幼児のしつけや教育の様子がわかり興味深い。子どもには子どもの世界があるというイギリス人の考え方、他人に対する思いやり、また友だち同志のローヤリティの養成がイギリスで大そう目立つ教育の仕方であることなど、大いに学ぶところがあつた。

幼児と保育

「まとはずれの保育をつく」

——正しい軌道にのせるために——
——というのが本号の特集である。

幼児教育の現場に強く浮かび出ているいろいろの問題、その一、都会地の幼稚園に見られる現象であるが、有名小学校入学の隘路のあたりを受けて、早くわが子を利巧にとあせる母親たちの、字を教えて下さ

い、教を教えて下さいと訴え要求してくるこの声に、さてどのような処理をし、説得をしたらよいのか。その二、世の中がおちついて、ぎりぎりいっぱい生活にある程度のゆとりができた結果であろうか、近時、バレー熱、ワイオリン熱、ピアノ熱、童謡熱、絵画熱……等善意に解釈しての才能教育の潮の襲来で、幼児教育の担当者たちは悩まされることが多い。これらの問題について。その三、ゆうぎ会を楽しみに待っているからたびたび催して欲しいという母親に対して、その正しい在り方をどのように説くか。その四、幼稚園に預けたからには何もかもお任せいたしましたと手ばなしでいる家庭に対して……

まず本号では以上のような現場の問題について、この道の指導者や識者が懇切な指導や説明を加え、その正しい在り方を述べながら、正しい軌道にのった幼稚園教育はどのようなものであるか、幼稚園は何をするところかといった、いわば幼稚園教育の

「いろは」を解明してくれる。四月の年度始めの号にふさわしい編集ぶりである。

その他、叱ってはいけないか、子どもの質問には誠意を持って、幼児テストの正しい理解と技術、たのしい保育室づくり、保育の実際に生かす視聴覚教材、幼稚園教育の六領域、など、幼児教育者にとって興味ある読みものぞろい。とくに本号からは父母と母親のための映画鑑賞教室が新設されて、波多野氏の心理学的解説が掲載されている。読み出すと止められない惹きつけぶりである。

保育ノート

新しい子どもたちを迎え、また幼稚園などでも新しい先生を迎えることが多いこの四月に当って、普段の生活で幼児に一番関係のあるわれわれ教師自身のいろいろの問題をとり上げています。

私たちは、自分自身のこととなると、何かと忙しさにとりまぎれてしまうことも多いし、また、普通に処理してすごしていることが、ひとりよがりでは、はたからみたくにそれが適当でない場合がある。こういう事柄は、たとえ気がついた人があったとしても、われわれが気がつくように、いつてくれることは期待できない。そこで新学期に当って、この号に書かれた「保育者のことばづかい」「保母の服装あれこれ」「保母のエチケット」などの各項目について、静かに考えてみることは大変意味のあることだと思ふ。

特に一頁の牛島義友氏の「保母の心がまえ」では、目に見えない、形にあらわれないう心もちの問題をとりあげ、教師という名前では、一面で教師の性格がつよくなってきたおそれはないだろうか。保育者で最もよい教育者といえる人は、母親的性格をもった人こそそれである、といえる。といい、さ

らに、「母親的性格とは」「教師の性格について」「保育者の性格について」でそれぞれ細かく述べられている。

最終頁の保母のまど、という欄では「保育用品の管理になやむ」という日頃われわれが困っている問題を提出され、松村康平氏が「二つの場合が考えられる」と解答をよせている。

保 育

今月の目次をみると、年少児（三歳児）の保育について一部とりあげてあることに目をひく。

守屋光雄氏は理論の方から、田中千鶴子氏は現場の立場から、述べられていることは、興味深い。

もちろん、守屋氏は、年少児保育の重要性、必要性、教育効果とくわしく述べられ、三、四歳になると基本的習慣もほぼ確

立し、大まかな全身運動も一応発達し、言語も、表現も、他人との交渉も一応幼稚園生活に入りうるまでに発達してくるから、この機をとらえ、子どもの欲求と発達にそ

くして家庭教育の欠陥を補い、家庭と協力して保育を行うと一年保育より望ましい結果が生れる。特に、人格方面において好ましい人間形成が行われるため、青少年期になって問題をもつものが少いことを述べ、幼稚園ずれとか生意気とかの世の中の考えに対し、自信づけられた同感の理由で皆さまでに購読をおすすめする。

一方、田中氏は三歳児保育の経験を通しその苦勞なざったこと、難点など指摘され、現場のものには参考になる。

いろいろの幼児の例もあげられているが、三歳児というものは特別であり、守屋光雄氏がいわれたように、家庭の保護をまだ受ける時代であるから、教育的意図はあるが、その扱いはもう一歩考えなくてはな

らないのではないだろうか。教師の三歳児に対する見解のたりなきて幼児を問題児扱いにするのはかわいそうだ。三歳児保育はむずかしい。世の中に叫ばれてきただけに、もっともっと研究し三歳児というものを知ることである。そして後計画をたて実践するので、現在、幼児の水準が高められてきた。というのは幼稚園の先生が高めてしまったようだ。が三歳は三歳児の発達しかしていないのだからその点、四歳、五歳から押した三歳児では困る。この田中氏のご経験にヒントをえて、大いに三歳児保育をもっともっと研究し、むずかしいものにするのでなく適切なものになりたい。よきヒントを与えられたようだ。

月刊保育カリキュラム

今月よりこの本の編集が東京に移行され、平井信義両氏を中心に張切って筆をとって

いられるのが、文章を通してよくうかがえる。

・山下俊郎氏の「望ましい教師の姿」は、よい先生となる資格八項目について述べられていて、新学年度を迎えるわれわれ保育者にとって（新しきも旧きも）心構えを示唆され、心の紐を結びたくなる。

・武田一郎氏の「子どもの成長とカリキュラム」は、幼稚園のカリキュラムの無、有論に対しどこまでもカリキュラムの必要のべていられる。ただカリキュラムというと硬いが、小学校のような教科カリキュラムでなく、あそびのカリキュラム、すなわち、よい経験をもたせるための保育者の心の準備としての意味である。

・山村きよ氏の「年間計画と目標設定について」は、二、三年にわたりとこの幼稚園でも見られる子どもの実態より取りあげられていて、注目すべきは四、五歳と、三歳

と、たて方を別にとりあげたことだ。四、五歳は教育要領に基き六領域に分けて考えられ、三歳は年齢が小さいだけにもっと融通性のある案、すなわち生活の中からのような保育を誘い出すかという点に工夫をこらした点だ。

・四、五歳児の指導として

四月のこどもの姿、生活指導、健康、社会、自然、言語、音楽リズム、絵画製作、両親教育、について各々幼稚園生活の第一歩として過す四月の指導を、具体的にかかっている。

・三歳児の指導としては

発達と特徴、保育技術（家庭から幼稚園への移行、あそびの導入）理想的な保育環境、母親への指導、として、それぞれ詳細にのべられていて、とかく迷いがちな三歳を受持つ保育者に指針をあたえてくれる。

幼稚園教育指導者講座

1 目的

幼稚園教育において当面解決を要する諸問題をとりあげて研究協議し、指導者としての基礎的教養および指導能力を高め、幼稚園教育の改善充実をはかる。

2 主 催

文部省 開催県・市および教育委員会 開催県所在の教員養成学部を置く国立大学。

3 期日・開催地

東部地区 七月十六日(火)～十九日(金)

於 仙台市東北大学教育学部

北海道 東北 関東 および

山梨 長野 新潟 静岡

西部地区 十月二日(水)～五日(土)

於 福井市福井大学芸学部

愛知 岐阜 富山 石川 福

井および近畿 中国 四国

九州

4 参加者

指導的立場にある幼稚園々長、教員のうち都道府県教育委員会または都道府県知事の推薦する者。

教員養成大学長の推薦する付属幼稚園長、教員等。

都道府県教育委員会 都道府県知事および教員養成大学長の三者で相互に連絡のうえ参加の調整をはかり、開催県に通知する。

5 研究班名および研究主題

幼児指導要録(指導の記録)欄記入の手順)

健康 (1)手洗い、用便、食事の習慣形成の系統的指導法 (2)低鉄棒、すべり台、ぶらんこ等の發展的系統的指導法)

音楽リズム (1)「音楽リズムに気をつけて歌う」系統的指導法 (2)「曲や歌に合せて自由にリズム的な動きをする」系統的指導法)

視聴覚教材の利用 (1)幻灯、紙しばいの効果的な利用法 (2)ラジオ、テープレコーダーなどの活用)

学級経営 (1)保育室の環境構成 (2)学級編成のしかた)

幼児の教育 第五十六巻 第七号

◎ 定価 五十円

昭和三十二年六月二十五日印刷

昭和三十二年七月 一日発行

東京都文京区大塚町三五

お茶の水女子大学附属幼稚園内

編集兼

発行者 津 守 真

東京都文京区大塚町三五

お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行所

日本幼稚園協会

東京都板橋区志村町五番地

印刷所

凸版印刷株式会社

東京都千代田区神田小川町二ノ五

発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京一九六四〇番

◎本誌ご購入についてのご注文は発売所「フレーベル館」にお願いたします。

教師養成研究会 幼児教育部会編著

幼児教育叢書

同編著
幼児教育の手引

A5・一七〇頁
価 一八〇円

幼児の教育課程
A5 第1集・
一八〇円

幼児の心理
A5 第2集・
一八〇円

幼児の健康指導と体育
A5 第3集・
一三〇円

幼児の社会性と指導
第4集・

幼児の自然観察
A5 第5集・
一三〇円

幼児の言語指導
A5 第6集・
一九〇円

幼児の音楽リズム
A5 第7集・
二〇〇円

幼児の絵画製作
第8集・
二月下旬

幼稚園の経営管理
第9集・

幼児の両親教育
第10集・

本書は文部省の幼稚園教育要領の支柱を悉くとりあげて解説すると共に、小学校教育との関連に留意し、幼稚園教員の単位取得にも絶好のテキストとして使用されるよう特に意を用いた。

東京都千代田区
神田錦町1の16

学芸図書株式会社

電話(29) 3023
振替東京 96491

幼年期の意味

進化論の立場から幼年期の重要性を鋭く衝く名著

ジョン・フイスク著 小川正通訳

新書判八四頁 定価八〇円 一六六

日本の幼児教育

その問題点をめぐりて

日本の幼児教育の問題点をえぐりだした鼎談

長田 新・山下俊郎・莊司雅子著

新書判一八四頁 定価一三〇円 一六六

発行所

株式会社 フレーベル館

東京都千代田区神田小川町二ノ五
振替東京二六四〇 電話(29) 七六一五

古い歴史と新しい編集の観察絵本

キンダブック

=第12集 第5編 8月号予告=



☆お子さま方の感情と知識を

豊かに育てる絵本☆

△4判・18頁
毎月付録付
定価四十五円

〈八月号内容予告〉

にっぽんの どうぶつ

指導・歌・戸川幸夫先生

☆にっぽんざる

絵・吉沢廉三郎先生

☆おさるの もんちゃん

その一 絵・鈴木寿雄先生

その二 絵・鈴木寿雄先生

☆しかの つの

絵・武井武雄先生

☆いたすらからす

絵・武井武雄先生

☆くまの ぼうや

その一 絵・安 泰先生

その二 絵・安 泰先生

その三 絵・安 泰先生

☆うぐいすの がっこう

絵・太田大八先生

特別付録(夏)の生活表

「よいこの なつ」

別冊付録「つばめの おうち」

工作付録「きんぎょ」

東京都千代田区 株式 フレーベル館 電話東京(29) 7781~5
神田小川町 2の5 会社 振替口座東京 19640 番

昭和三十三年七月一日発行(毎月一回一日発行)昭和三十三年四月十五日 第三種郵便物認可 日本国有鉄道特別扱承認雑誌第六八三号 幼児の教育 第五十六巻 第七号 定価五〇円 千四円